

# 司馬遼太郎全集月報 35

声明と木遣と演歌

司馬 遼太郎

日本文化のおもしろみのひとつは、過去からの連続性が濃厚なことである。その上、貯蔵能力も高い。古代や中世の歌謡の歌詞までが豊富に保存されているのは、中国にはない現象で、ヨーロッパでも、宗教的な歌をのぞけば、日本ほどではないはずである。

『古事記』『日本書紀』には、あわせて二百三十五という大量の歌謡が記録されている。ほかに、神楽歌や催馬楽といったふるい時代のものがあり、中世になると『宴曲集』がある。流行歌(今様)をあつめた『梁塵秘抄』があり、『閑吟集』があり、狂言のなかの歌謡がある。本来、口誦されて消えるべき性質のものだが、これだけ記録としてのこっているのは尋常なことではない。

たしかに、うたうことのすきな民族だったことはわかる。しかしどういふ調曲だったかとなるとわからない。とくに奈良朝

司馬遼太郎全集  
第三十五卷月報  
第二期第三回配本  
1983年6月

## 目次

声明と木遣と演歌……………	司馬遼太郎
編集者としての春と秋……………	粕谷一希
司馬さんと駒場……………	芳賀徹
主要登場人物のおもな経歴I……………	
主要登場人物のおもな経歴II……………	

株式会社 文藝春秋  
東京都千代田区  
紀尾井町3-23

以前のむかしとなれば、茫々としてゐる。「上代の歌謡は恐らく平家琵琶の白声のように、朗読風に近いものであったのではなかろうか」(『芸能史叢説』)と岩橋小弥太博士はいわれるが、おそらくそうであつたらう。

自分自身を楽器のようにしてうたうという思想も技術もなかった。またリズムやメロディよりも、口から出てゆくコトバそのものの呪術性のほうが当時の宗教感情としては大切であつた。言霊としての歌詞が、神である自然や、心をもつ相手の女や男に理解されなければ無意味になってしまうため、岩橋博士のいわれるように、ある程度の抑揚をこめて朗誦したものかと思える。調曲よりも歌詞が大切とされたからこそ、語部の記憶に貯蔵されて行ったものにちがいない。

文化というのは、外来のものからの刺激で広さ、深さ、多様さを形成してゆく。

古代日本人もまた身ぶりをまじえ、足を踏みならし、言葉にふしをつけて自他ともに愉しむということを知っていたにちがいない。しかし、粗笨なものであつたらう。まだ、天才が出現

して型をつくりだすというまでには至らなかつたと思われる。集団で、同じ所作をして踊り、かつうたうというものが型として成立するのは、記録では踏歌からである。

踏歌は、河内や大和に住んでいた漢人のあいだでは、早くから伝承されていたかもしれない。漢人とは、記録としては、朝鮮半島から渡来したひとたちである。ただし、かれら自身は百濟人とも高麗人ともいわなかった。中国人の末裔であると自ら称し、中国の文章を書くという技能によって、古代の官僚機構のなかで特殊な地位を占めていた。『日本書紀』の持統天皇七年（六九三年）正月のくだりに、

漢人等、踏歌ヲ奏ス

とある。以後、宮廷のある場合の儀礼のなかに、踏歌を奏することが組み入れられるようになった。踏歌の源流は、記録としては朝鮮半島ではない。唐の長安の正月十五日上元の夜、高灯のもとで子女が袖をつらねて歌舞した風俗にあるという。歌詞もはやしこばもすべて漢語漢音であった。このため、当時の日本人は、拍子だけでおもしろさを感じた。

おそらく踏歌は声楽といえるほどのものではなかつたにちがいないが、型にはなつた。型をみながまなぶうちに、天才がその内容に不満をもち、それを動機に、変形をうんだという効用はあつたろう。それが歌姫（歌垣）でのうたい方に変化をあたえ、のちの盆踊りの音頭や拍子に影響をもたらしただろうことは

想像できる。

声楽といえるものが入るのは、平安初期、真言宗の創始者空海や天台宗の円仁によるといわれる。かれらが入唐して「声明」というものをもたらしたということになっている。声明はいまでも聴くことができる。僧が法要などで唱えているあのふしぎな発声と高低抑揚の調曲のことである。

ついでながら、記録にあらわれる仏教音楽（むろん声明が主であつた）の日本への導入者は、空海ではなく、かれよりすこし先輩の永忠という僧であつた。永忠は山背の秋篠氏の出で、若くして唐に留学し、在唐三十年というひとであつた。

空海が長安の西明寺に寄宿したとき、偶然かどうか、寺の者が空海に、かつて永忠が住んでいた部屋をあてがつた。奈良時代、日本が唐に送つた仏教音楽の専修者は永忠だけではなかつたはずだから、声明の伝来はもっと古いかもしれない。

声明の源流は古代インドにあつた。この地で多様な楽器、声楽がさかえたことはよく知られている。古代インドでは、声が神秘的にあるいは音楽的に出されることによつて呪力を帯びるという信仰があつたらしく、やがてその文化が、神聖なものをつづることに使われ、発達した。発声を快感の体系にする——芸術化する——ことで自他とも愉悅するというシステムの完成は、一説によると古代インドはヨーロッパより早かつたといわれており、グレゴリー聖歌の淵源まで古代インドの声明にもと

めるといふ考えもある。

声明は、仏教東漸の道をつたつて中国に入った。中国で整理され、日本にもたらされた。平安期の仏教界では僧侶のなかでも特殊な技能者として声明師という専門の声楽家が誕生し、いまも日本の仏教各宗にその技術の系譜がつづいてる。

平安期の声明師たちは専門の声楽家として存在した。かれらは多くの弟子を養成し、やがてその種子が一般にまで散つて根づき、日本文化のなかでうたを育て、さまざまな形になって芸術化された。平家琵琶のうたい方もそうであり、謡曲もその系譜をひいている。さらには江戸期に発達した邦楽のうたい方も、もとはすべて声明にある。

ここまで書いてきて、木遣をきいたときの気分のいい音色が、耳の奥によみがえってきた。

『胡蝶の夢』という小説を書くころとしていたときである。その主人公のひとり、江戸末期の幕府の医官の養子として江戸で青年期を送つた。かれも当然、木遣を青春のどの場面かできいている。

ついでながら、土地々々の気分は、存外芸者が伝承していることが多い。私は『峠』を書いたときも、越後長岡の気分は、人が入れかわつたようにべつな町になっていることにおどろき、ついに芸者をよんでもらつて、さまざまな音曲をきき、救われたことがあつた。私などの年代ではもう芸者に性的魅力が

感ずるなどという感覚はもちあわせていないが、それだけに、彼女らが、ときにその土地の土霊であるかのように、土地のにおいのこもつた芸を伝承していることに純粋に——子供っぽく驚かされてしまう。

右の『胡蝶の夢』の主人公のひとり、遊里の情緒を解したずいぶんな遊び人であつた。このため、『峠』の場合と同様、主人公たちの気持になつて、神田の明神下へ行ってみた。

明神下はいまはさびれている。しかし芸者の歴史としては、東京でもっとも古く、幕末には、講武所芸者などとよばれて格の高さを誇つたものであつた。友人をさそつてそこで一夕飲んだが、その後きくと、その小さなやかたも、時代の波というか、立ちゆかなくなつて廃業したという。ともかくもその夕、その席に、老若ふたりの芸者がきた。

べつに何の注文もせずにいると、若いほうが演歌が自慢で二、三うたつた。さすがにうまいものだと思心したが、しかし内心、東京の芸者はそれしかできなくなつていのかと、失望したりした。酒を十分過ぎ、そろそろ立ちうかとおもつたころ、若いほうの妓が、不意に、木遣をやりましよう、といつて、ながながとうたつた。じつにみごとなものだつた。

きくと、祖父かなにかが鶯の頭だつたという。東京の彼女のうまれたあたりでは、鶯の頭が死んだとき、若い者たちが青竹を組んだ担架のようなものに死者を寝かせ、それをかついで、木遣をうたいながら世話になつた町内を練りあるくののだという。そのときの木遣です、と彼女はあとでいつた。

この齢になるまで、木遣は幾度かきいた。小耳にはさむ程度  
の関心でしかきかなかったが、彼女の木遣には、発声法とい  
い、節といい、もともと筋のいい声明が、脈打つようにして生  
きていた。

明治後、オルガンにあわせてうたう小学唱歌の普及が、声明  
式の神楽のうたを一举に、過去のものにした。大正期から流行  
する流行歌が、日本人のうたの感覚から、声明を消し去った。  
敗戦後、声明の末裔の枝わかれともいふべきなにわ節もすたれ  
た。

ただ、敗戦後に流行歌の首位を占めはじめた演歌というもの  
が、声明のいのちというほどでなくても粘液のようなものをか  
すかに伝承しているのではないかと思ったりするが、これは多  
分に聴きようの問題に属していて、異論があるかもしれない。

### 編集者としての春と秋に

粕谷 一希 (評論家)

昭和三十三年から三十五年にかけて、私は中央公論社の出版  
部に籍があった。そこには、現在、紀行作家(あるいは乗物作  
家?)として活躍中の宮脇俊三氏や直木賞作家網淵謙錠氏な  
ど、多士済々の連中がトクロを巻いていて、皆、若かった。そ  
の網淵謙錠氏は谷崎潤一郎全集を担当するかわら、尾崎士

郎、中山義秀、子母沢寛といった歴史小説を手がけている作家  
の許に通っていた。のちに子母沢寛全集が刊行される運びとな  
ったとき、網淵さんはある会議の席上、  
——子母沢さんの次は、司馬さんの全集を出すべきだと思  
います。

と発言した。司馬さんの旺盛な作家活動が始まる初期のころ  
で、普通には奇異な感が抱かれるほどの発言だが、私は卓見だ  
と思った。いかにも網淵さんらしい歴史文学の正統的系譜を読  
み込んでいる発言であった。網淵さんは、酒が入ると、あの凜  
凜と響きわたる大声で、子母沢仕込み、司馬仕込みの幕末夜  
話、余話の数々を、微細にわたって語って倦きなかつた。

昭和三十六年一月、網淵さんと私は「中央公論」編集部に移  
った。「風流夢譚」事件に対応する補強策でもあった。新編集  
長笹原金次郎の許で、両次長として笹原編集長を補佐した。池  
田内閣の高度成長政策の下、次第に政治的無風時代が現出し、  
中央公論社の傷痕も癒えてゆかみにえた。

司馬さんは、「週刊コウロン」に『上方武士道』を、『小説中  
央公論』に『新選組血風録』を連載された。やがて『週刊文  
春』に『燃えよ剣』の連載が始まった。われわれは憑かれたよ  
うに司馬文学に熱中し、笹原・網淵・粕谷がつるんで呑むとき  
は、新選組の歌がお定まりの愛唱歌であった。

笹原宅にある夜、泥棒が入ったが、主人は泥棒と入れ替りに  
ご帰宅になるといふ一幕があり、よくまあ、続くものだと思  
うほど、編集部の中は皆呑んだ。想えば、笹原氏も四十歳、全

員が三十代、二十代の若造であった。編集者としての青春時代  
は『血風録』の記憶と共にあったといっても過言ではない。

『空海の風景』は、『中央公論』の昭和四十八年一月号から、途  
中、二回の休載を挟みながら(『長安から北京へ』の中国紀行のた  
め)昭和五十年九月号まで掲載された。出発当時は、二度目の  
笹原編集長であったが、笹原氏が退社されたため、私自身もま  
た、二度目の編集長として『空海の風景』の創作に立ち会う幸  
福に恵まれた。交替の挨拶にご自宅に伺ったとき、司馬さん

は、数時間にわたってジ  
ヤーナリズム論を展開さ  
れた。

やがて、連載が終った  
あと、司馬ご夫妻と担当  
のY君と共に、高野山に  
のぼった。完結記念のグ  
ラビア撮影のためであ  
る。ちよと冷え冷えと  
した秋日和のところで、途  
中の閑談も、高野山の参  
道も、泊った宿坊での酒  
と会話も、その場面の一  
つ一つが鮮明な画像とし  
て、昨日のことのように

# 敬愛人

西郷隆盛書「敬愛人」

私のなかにある。私自身の編集者生活も終りに近づいたことを  
漠然と予感していた気がする。

最近、名著案内を某社から依頼されて『空海の風景』を再読  
して、この書が司馬さんの青春の書でもあることを発見した。  
私の最初の書物に対して長文の感想をお寄せ頂いたことと合せ  
て、さまざまな青春への追想の表現形式があることを痛切に想  
う。

司馬さんという存在は、私にとって、敬愛する作家であり、  
歴史という尽きない宝庫へ誘う水先案内者であり、そして勝手  
連風に言わせていただけば、ジャーナリストとしての出処進退  
を考える際の導師でもある。

### 司馬さんと駒場

芳賀 徹 (東京大学教授)

私が教えている東大教養学部には三、四年生のための専門課  
程として、文科系には教養学科というのがある。実は私自身、  
この学科の卒業生なのだが、これが昭和五十六年に創設三十周  
年を迎え、いくつかの記念事業を行うこととなった。その一つ  
に、記念式典の際にどなたか大学外の方に講演をお願いする  
という話があった。

さて、どなたにしよう——教師側も学生側も一緒の委員会

# 主要登場人物のおもな経歴 I (明治元年～六年)

人物名	明治元年 (1868)	明治二年 (1869)	明治三年 (1870)	明治四年 (1871)	明治五年 (1872)	明治六年 (1873)
三 条 実 美 (1837-91)	①副総裁議定②大納言4左近衛大将 ・従一位	⑦右大臣	⑫東京府貴属	⑦神祇伯宣教長官 ⑦兼大政大臣		
島 津 久 光 (1817-87)	(従四位上)	③参議・左近衛中将・従三位⑥権大納言・従二位(辞退)		⑨従二位 (勅により久光をして別に家を樹てしむ)	①太陽曆採用	⑫内閣顧問
岩 倉 具 視 (1825-83)	(議定)①副総裁②右近衛督・従三位	①正二位⑦大納言 ①兵部省御用掛	⑦民部省御用掛	⑦外務卿⑩右大臣 ①特命全權大使として欧米へ派遣	(海外)	⑨帰朝
西 郷 隆 盛 (1827-77)	⑤大総督府参謀 ⑤従四位下・参与	⑨正三位(辞退) 「我藩主忠義公は従三位にして其藩主たる余の正三位に叙せらるゝは人情の忍びざる所なり」	⑦鹿児島県大参事	⑥参議・正三位 ⑥大蔵省御用掛	⑦兼陸軍元帥・近衛都督	⑤陸軍大将兼参議 ⑩辞任十年②官位(刺奪)
大 久 保 利 通 (1830-78)	②徴士参与(内国事務局判事) ④従四位(辞退)	⑤従四位⑦参議 ⑨従三位	⑦民部省御用掛	⑥大蔵卿⑦制度取調専務 ①議長①副使として欧米へ派遣	(海外)	⑤帰朝 ⑩参議 ①兼内務卿
木 戸 孝 允 (1833-77)	②徴士参与(総裁局顧問) ④従四位下(辞退)	⑨従三位	⑥参議	①副使として欧米へ派遣	(海外)	⑦帰朝
板 垣 退 助 (1837-1919)	②東山道総督府参謀⑥大総督府参謀(奥州転戦)	①版籍奉還 ④徴士参与・従四位下	⑩高知県大参事	⑦参議・従四位・工部卿⑫正三位		①徴兵令 ①内務省設置
後 藤 象 二 郎 (1838-97)	②徴士参与(総裁局顧問) ④外国事務局判事 ④従四位⑦兼大坂府知事	②辞任 ⑤従四位下		⑥工部大輔 ⑦制度取調専務 ⑨議長⑫正四位		④参議 ⑩辞任
江 藤 新 平 (1834-74)	④徴士 ⑤従五位下 ⑩東京府判事	⑤佐賀県権大参事 ①中弁	②制度取調専務	⑦兼文部大輔 ⑧副議長 ⑫従四位	③兼教部省御用掛 ④司法卿 ⑤従四位	④参議 ⑩辞任(七年③位階(刺奪))
大 隈 重 信 (1833-1922)	③徴士参与⑤外国官判事・従五位下 ⑫外国官副知事	②従四位下⑦大蔵大輔・民部大輔	⑦大蔵大輔専任 ⑨参議	③各国内閣改定御用掛⑥大蔵大輔 ⑫正四位		⑩大蔵卿

\*○数字は月・白ヌキ数字は閏月

なかなか賑やかな議論となった。学生側はアンケートまでして何十人かの名前を出してきたが、学生というのはこういうとき意外に保守的、権威主義的であるか、ふざけるかのどちらかである。古い進歩派の名士とならんでタレントや女優さんの名前まで出てきた。だが、教師側として学生のなりあがり、T・S・エリオットとかトインビーのような人とか、ケネス・クラーク氏はどうかとか、旅費どころかお礼もろくに払える予算ではないのに話ばかりが大きくなった。

大体、教養学科というのはアメリカ、フランス、アジアといった地域単位の分科から、国際関係論、文化人類学、科学史の分科まで、小さいながら多岐にわたるから、各分野それぞれの思わくや希望をひたしく満足させるといのは大変難しい。京都の先生方や江藤淳さんの名もあがって、結構たのしく採みあうなかで、当然、司馬遼太郎さんの名前が出てきた(その名をささやいたのは私だった。すると、一、三回のやりとりのあとに、皆「なるほど」という顔になって、ことはきまってしまった。司馬さんは教師・学生また卒業生の意向をあわせて今日の日本で考えうる最大公約数の人だったのである。

最大公約数などというのは語感が悪いが、もともとわが駒場には司馬文学のファンが多いのはたしかである。すでに十年前、昭和四十七年には、『教養学部報』という(かなり高級を学内新聞で、哲学、日本史、外国語などの教官が集まって、『坂の上の雲』の司馬史観を論ずる大座談会を催したこともあった。駒場の国際派日本学と司馬史学とはあちこちで相通じ、め

ぐりあうところが多いのだろう。私の師、比較文学の島田謹二教授は、広瀬武夫や秋山真之の研究において司馬さんと肝胆相照らすともいえるべき間柄であるし、司馬さんが日本比較文学会の学会などには割合気軽に参加して発言して下さることも、私たちは知っていた。

司馬さんは私たちの願いを聞き入れて下さって、式典の日には忙中を上京、みごとに記念講演をして下さった。「アジア諸国との対比において見た日本社会の性格」という、まさに教養学科三十周年にふさわしい、中国・朝鮮・日本、そして貨幣と儒教と製鉄技術と役人道の問題をおおう、遠大で大胆で、しかも個人的見聞と見識と裏打ちされた名講義であった。司馬さんのすぐ前に行なわれた総長の祝辞が、総長に気の毒なほどに遠く霞んで消えてしまった。

『教養学部報』にのせた右の講演の要旨をいま読み返し、あわせて最近の『菜の花の沖』を読みすすめていると、司馬さんにはぜひまた駒場に来ていただきたいという思いに駆られる。今春からは教養学科の上に、比較文学比較文化、国際関係論に地域文化研究その他の新専門課程も加わって、総合文化研究科という新編成の大学院が発足した。そのどの専門課程にも、『菜の花の沖』一つだけでも実に豊富な方法論上の、また視野と解釈の上での刺戟を与えてくれる。関係の教師・学生が集まって、一度たっぷりと司馬さんを囲む会してみたいものである。

司馬の二文字を合わせれば駒場の駒となるのも一つの因縁、この月報を借りていまからお願ひしておこう。

## 主要登場人物のおもな経歴 II (明治元年～六年)

勝安芳 (1823～99)	川路利良 (1836～79)	桐野利秋 (1838～77)	大山巖 (1842～1916)	西郷従道 (1840～1900)	黒田清隆 (1843～1902)	井上馨 (1835～1913)	山県有朋 (1838～1922)	伊藤博文 (1841～1909)	前原一誠 (1834～76)	大木喬任 (1832～99)	副島種臣 (1828～1905)	明治元年(1868)
					④北越征討参謀	②徵士参与(外国事務判事)⑤外国官判事・従五位下(辞退)⑥佐渡県知事	①北陸道鎮撫	②徵士参与(外国事務判事)⑤外国官判事・従五位下(兵庫県知事)	⑦新潟府判事 ⑥参謀	④徵士参与(外国事務判事)⑦従四位下(辞退)⑫東	③徵士参与(制度事務局判事) ④従四位下(辞退)	明治元年(1868)
⑦外務大丞⑧辞任 ①兵部大丞			欧州へ	⑥欧米へ派遣	⑦外務権大丞 ①兵部大丞	⑧造幣頭⑩民部大丞・大蔵大丞 ①従五位	⑥欧米へ派遣	⑦大蔵少輔 ⑧兼民部少輔	②従五位下 ⑦参議・従四位 ⑫兵部大輔	⑤従四位下①東京府権知事	⑤従四位下 ⑦参議	明治二年(1869)
⑥辞任				⑧帰朝・兵部権大丞 清国へ	③従五位⑥開拓次官・従四位・欧州	⑦大蔵大丞専任 ①大蔵少輔	⑧帰朝・兵部少輔 ・従五位	⑩米国へ派遣	⑨辞任	⑦民部大輔	③正四位 ⑤外務省出仕	明治三年(1870)
			③帰朝④兵部権大丞・正六位⑦陸軍少将⑧陸軍少将①仏国へ留学	⑦陸軍少将・兵部大丞⑫兵部少輔・正五位	⑥帰朝 ⑦陸軍少将・兵部大丞⑫兵部少輔・正五位	⑥民部少輔・制度取調事務⑦民部大輔 ・大蔵大輔⑫従四位	⑥兼制度取調事務 ⑦兵部大輔 ⑫従四位	⑤帰朝⑦租税頭⑨工部大輔①特命全權副使として欧米へ		⑦制度取調専務・民部卿・文部卿 ⑫正四位	⑤外務省御用専務 ⑤樺太境界談判で露国系ジェット湾へ ⑦帰朝①外務卿	明治四年(1871)
⑤海軍大輔 ⑥従四位	⑤選卒総長⑥正七位⑧警保助⑨欧州へ派遣⑩従六位	⑦兵部省出仕・陸軍少将・従五位			②陸軍少輔③陸軍少将・近衛副都督		②陸軍大輔 ③陸軍中将・近衛都督	(海外)		⑩兼教部卿	④条約改正取調御用掛	明治五年(1872)
⑩参議・海軍卿	⑨帰朝 (七年①大警視)	④陸軍裁判所長 ⑥正六位	(七年⑩帰朝)	①従四位	⑦兼陸軍大輔 ①従四位	⑦七年⑥陸軍中将・開拓次官	④辞任⑥陸軍卿 ①正四位七年⑧参議	⑨帰朝 ⑩参議・工部卿		⑩兼司法卿 (九年⑩位階剥奪)	②特命全權大使として清国へ⑦帰朝 ⑩参議・外務省事務総裁・辞任	明治六年(1873)

# 司馬遼太郎全集月報 36

## 醤油の話

司馬 遼太郎

信州というのは、近世以後、堅実な知識人を出しつづける風土として知られるが、源平時代以前は太古以来の森のようにしずまっていた。

木曾谷から木曾義仲が出たときから活況を呈するようになる。かれは一国の武士層をこぞって平家と戦い、頼朝より先んじて京に入った。のち頼朝の政戦略のためにやぶれはするものの、ともかくもその配下の信州人たちは、一度は京で兵馬の権をにぎり、天下意識をもった。このことは、古沼のような風土をかきまぜて酸素を入れる効果があったのか、右の時代につづく鎌倉時代になると、多くの変わった人物がこの地から出る。のちに臨済禅の巨人のひとりになる覚心（二二〇七―九八）もそのひとりであった。ただ、かれには、鎌倉期の禅僧にありがちな華美なところがない。

鎌倉期の禅僧のあいだで「頂相」が流行した。禅は、本来、

司馬遼太郎全集  
第三十六卷月報  
第二期第四回配本  
1983年7月

### 目次

醤油の話……………	司馬遼太郎
司馬さんの思い出……………	ドナルド・キーン
二つの失言的な質問……………	牧 祥三
地図（台湾出兵要図、鹿児島要図）	
地図（十九世紀半ばの日本周辺の国際環境）	

株式会社 文藝春秋  
東京都千代田区  
紀尾井町3-23

極端に個人主義である。そのさとりは師一個から弟子一個に以心伝心される。法を嗣いだ弟子は師の肖像画や木像をつくって賛仰した。このため、この時代、肖像の上手な画家や彫刻家が活躍し、多くの傑作がのこされた。

覚心にも木像がある。曲衆にすわった全身像（京都・妙光寺蔵）で、八十六歳のときのものである。鎌倉彫刻の傑作のひとつだが、出来ほどに知られていないのは、素材である覚心の相貌が地味で造作が小さく、さらには老いすぎている、造形以前の迫力に欠けるところがあるせいではないか。木像になってもめだつことをしない人物ともいえる。

かれは、いまの松本市の西南方にある神林という里にうまれた。俗姓は、常澄氏という。おそらく農民の子だったろう。「元亨釈書」（鎌倉末の成立。仏教史書）によると、母が戸隠の観世音に祈つてみごもったという。かれには母親の存在が大きく、十五歳で神宮寺に入って、仏書や経書を読んだという履歴も、母親のすすめによるものにちがいない。源平時代以前なら農村に埋没して当然だった境涯の子が、鎌倉期になると親がすすめ

て学問をさせるといふふうには時代のおいが変わったのである。

この時代、平安期の仏教である天台・真言もおとろえ、すでに禪・浄土教などという新仏教が登場している。が、かれは奈良の東大寺に行つて受戒(正規の僧になること)した。華嚴経を主とする東大寺などは、最澄・空海のころでもすでに古びたものとされていたが、覚心は信州の田舎から出てきたために、思想の潮流がよくわからなかったのであろう。そのあと、高野山にのぼり、伝法院と金剛三昧院で密教をまなび、行勇という高僧から相伝をうけた。華嚴から真言にいたるなど、奈良・平安の仏教史を体験的に逆にとどっているようなものであった。しかも密教については、鎌倉の寿福寺の紀綱をつかさどつたというから、こんにちでいえば大学の助教授ほどであったかと思える。

その後、師の行勇が死ぬと、京にのぼり、禪に転向した。禪も、流行の臨済禪ではなく、宋から曹洞禪をもちかえつた道元(一一〇〇—一二五三)に就いた。年は三十半ばになっていた。晩学ながら大いに修行し、道元から、戒脈をさすけられた。

密教と曹洞禪では思想の根底からして異なっている。そのいづれものいわば学位を得たというのは、覚心にとつて求道よりも、異なる思想体系を学ぶことが楽しみだったのかも知れない。四十をすぎて上州の世良田の長楽寺にゆき、栄朝という学僧のもとで修学した。栄朝が死ぬと、鎌倉の寿福寺にもどつて朗誓という学僧についた。もはや仏教の思想的遊歴者というべく、

寺々での顔も広くなった。あるとき、寿福寺の大殿ですわつていると、ふところからぞろぞろと小蛇が出た。幻覚が去ると、意外にも心が晴れている。

——従前ノ学解ハコトゴトク究竟(くわいぎょう)デハナカッタ。

いままでも仏教を知的に理解しただけで、解脱でもなんでもなかった、ということにおそまきながら気づくのである。

かれは、入宋(にっぽん)を決意した。前後から考えて、紀州由良(高野山領)の地頭で僧としての名を願性という者が、費用を出したらしい。

四十三歳、由良から出帆し、博多をへて、こんにちの浙江省の寧波(當時は明州)に上陸した。径山(ていざん)のぼつて癡絶(ちせつ)という僧に参じ、さらに各地によき師をたずね歩き、ついに四十七歳のとき、無門という師を得て大いに悟り、印可を得た。宗旨は、臨済宗である。

在宋六年で由良にもどり、地頭の願性が建てた西方寺(のち興国寺)に住して、田舎僧になった。

その後、かれの名は高くなり、九十二で死ぬまでのあいだ、龜山上皇や後宇多天皇など権門勢家からしばしば招きがあった。ときに京の巨剎に住したこともあったが、わずらわしさに堪えず、あるとき脱走して紀州由良にもどり、終生西方寺を離れなかった。

覚心は、味噌がすきであった。とくに径山寺(ていざんじ)で癡絶に参学し

ていたときに食べた味噌の味がわすれられなかった。

紀州の由良は入江である。また由良の北にも入江があつて、湯浅という。覚心は湯浅に行つたとき、その地の水の良さが気に入り、径山でおぼえたつくりかたで味噌をつくつた。炒つた大豆と大麦のこうじに食塩を加えて桶に入れ、ナスや白瓜などをきざみこみ、密閉して熟成させる。

こんにち私どもが「きんざんじみそ」とよんでいるなめ味噌の先祖だが、覚心の味噌醸造にはそれ以上に奇功があつた。のちにいうところの醤油までできてしまった。

醤油以前の調味料としてはひしおなどがつかわれていたが、径山寺味噌の味噌桶の底にたまつた液で物を煮ると、その美味はひしおのおよぶところではないことがわかつた。湯浅のひとびとはその溜りをさらに改良し、文暦元年(一二三四)にはこんにちの醤油の原形ができた。

醤油の古い起源が湯浅にあることはほぼ異論なきさうだが、その後の発達史については多様でここではふれない。

私がおもしろいとおもうのは、覚心の人生である。かれは愚直なほどに各宗の体系を物学びしたが、古い宗旨の中興の祖にもならず、また一宗を興すほどの才華もみせなかった。

しかし以下のことはかれの人生の目的ではなかつたが、日本の食生活史に醤油を登場させる契機をつくつた。後世の私どもにとって、なまかな形而上的業績をのこしてくれるより、はるかに感動的な事柄のようにおもわれる。

## 舞台再訪

## 司馬遼太郎

「翔ぶが如く」を書き終えてから、もう一度取材のあとを訪ねてみた。ゆつくりとした日程がとれなかつたため、当時主戦場になつた熊本県や宮崎県にはゆかず、鹿児島だけにどめた。

市街の西のはずれに武とい町がある。維新後、西郷隆盛が二階堂という家老から屋敷をゆずりうけてここに住んだが、いまは訪ねるひともない。近所で働いていた土地の土工さんが、「長くこの町内で仕事をしているが、ここが西郷どんの屋敷とは知らなかつた」と

といった。門は新にでもされたのか消滅してなく、庭は草原になり、残っている母屋は傾いたままほこりっぽく朽ちている。所有関係がどうなっているのか知らないが、母屋に声をかけても、人の気配はなかつた。やがて朽ちはてるにちがいない。

市内の丘の上の薩軍墓地に行つた。西郷、桐野、篠原以下の薩軍の士卒の大きな墓碑の群れが、桜島にむかつてしるじろと整列している。戦後、官の出先である県庁が整備したもので、いかに当時の官が鹿児島県を憚つていたかが想像できる。

始良郡の一隅にある蒲生という土地に行つてみた。蒲生郷土が集落をなしている小さな町で、町は古くから碁盤の目に区劃され、郷土屋敷が青い石垣をつらねている。転戦してついに鹿児島城下をめざして敗退してきた薩軍が、この蒲生に入ったときはほつとしたに相違ない。西郷は薩将のひとりの野村忍介に「この蒲生で官軍をふせう」と命じた。そのくせ兵も銃器もつけてやらなかつた。西郷というのはどこか変なところがある。

ただ酷いところは、すこしもなかつた。維新後に巨大化した虚名を、当の実像のほうがあひたすらに持てあましていたにちがいない。(文藝春秋デラックス「翔ぶが如く」と西郷隆盛」52・1より)

## 司馬さんの思い出

ドナルド・キーン (日本文学研究者)

私が司馬遼太郎さんに始めて会ったのは昭和四十六年十一月のことである。司馬さんと対談してみないかと編集者が誘ってくれたが、かなり迷った。というのは、司馬さんのお名前や評判はよく存じていたが、当時、近世文学史を書いており、司馬さんの作品を読む時間がなかった。大変人気のある作家に会っても、その人の文学についての感想が言えなかつたら具合が悪いのではないかと編集者に伝えたら、早速、十数冊の本を取り寄せてくれた。啞然として本の山を眺めたり、何処から読み始めたらいいだろうか等と迷っていたら、編集者から連絡があり、「自分の本を読まない方がいい」という言付けがあったとのこと。私の問題を推測して下さったのか、それとも編集者から何か言われたのか、よく分らないが、司馬さんの綿密な心づかいに感銘し、対談に応じることにした。

対談については司馬さんの方から注文があった。対談が三回にわたったとしても関西から離れないという条件だった。私はその条件にもすっかり感心した。明治時代以来、東京は大きな磁石のように日本全国の作家を引きつけるようになったが、頑として関西から動こうとしない司馬さんを尊敬した。ともかく、奈良、京都、大阪という順序で会場を変えながら対談する

ことになった。

司馬さんに会ったのは奈良市内ではなく、平城宮址であった。日本史を論じる対談の出発点としては極めてふさわしい場所だったが、始めて人に会う場所としてはちよつと殺風景であった。次の対談場所は京都だったが、一応銀閣寺でお会いし、写真を撮って貰ってから、寒がり屋の司馬さんは、暖房のきいていない、蠟燭の明かりしかない部屋で対談することに気乗りしなかったらしく、料亭へ移ることにした。

一回目と二回目の対談の時は話題等がほとんど覚えていられない程、緊張を感じた。司馬さんにはこやかに話して下さったので、緊張を感じる理由がなかったが、司馬さんのような物知りに会ったのは生まれて始めてだったので、自分の無知を暴露しないように司馬さんのお話を丹念に聞くようにした。同時に、頭の隅では自分にも何か言うことがないかと必死になって考えていた。

正直に言つて、奈良と京都の対談は、大きな博物館の中で迷っていたというような感じで、エジプト彫刻もあれば、恐竜もあり、仏画もあれば、印象派もあったという漠然としたことしか覚えていない。博物館も結構面白いところだが、保存されている宝物についてくわしく質問される場合はゆっくり見物する気はしない。

しかし、三回目の対談は違っていた。司馬さんは相変わらず他の誰も知りそうもないさまざまな話題を提供して下さいましたが、古くて、いかにも庶民的な大阪の料理屋で、温かい雰囲気

に囲まれていたので、対談といういかめしい条件を全然感じず、博物館を思わせるような気配がなく、むしろ親しい友達と知恵競べをしているような快感を覚えた。いつの間にか司馬さんの友人になってしまい、対談を終えてから一緒に御堂筋をさまよっていた時、関西の別のところでもう一度やりませんかと言いたい位だった。

あの時の対談を基にして出来た『日本人と日本文化』という本を今読むと、緊張の跡は微塵もない。初めから終りまで司馬さんの聡明さと親切さしか感じられない。三回目の会合までそれを悟らなかつた私はよっぽど鈍感であつたと言う他はない。

## 二つの失言的な質問

牧 祥三 (元大阪外国語大学学長)

もう十数年前のことになるが、ある公用で司馬氏の大阪郊外、東大阪市の家を始めて訪ねた。別に豪邸でもなんでもない、会社の手堅い部長さんが住んでいるような住居である。それだけに、あまり大きくもない応接間に案内されてびっくりした。その壁々に高名なフランス現代画家たちの、しつかり描きこまれた絵画が並んでいるのである。無遠慮な私は思わず訊ねたのである、「これ、本物ですか。」作家は無作法な質問に失笑することもなく、みな実作だと教えてくれた。

文藝春秋社の池島信平氏が司馬氏との対談で、ほとんど一切

の世間的なホビー、娯楽に関心のないことを知らされて、何を楽しみに生きているのかと嘆息している。おそらく清教徒的生活のこの作家が心を遊ばせる僅かな喜びのひとつは絵画なのであろう。

私は先年司馬氏から贈られた、自作の水彩スケッチの一枚の絵を珍重している。古い仏寺を正面にすえて近写した、作家のたのしげな凝視の眼がうかがえる、気もちのよい絵である。

司馬氏に、京都の洋画家須田国太郎の作品について温い傾倒と深い理解とをあらわす文章がある(中央公論社刊、『日本の名画、須田国太郎編』)。ときに極めて晦渋なこの画家の特質を分析して、それは多様な要素を「泥濘を手で掻き掘りしてゆく作業」であり「最終の作品に達するまでに変化しつづけ」るが、この絶えざる苦闘を推進し、そして完結するものが「強靱な知的握力」だとする。「泥濘を手で掻き掘り」する類の画家でも、林武や中川一政などでなく、須田国太郎に司馬氏が親近を感じるのには興味ぶかい。須田国太郎の絵画は、道程としてはドロッコ



明治初期の「ボリス」

の作業があつても、最終としてその知的意欲が志向し、また成功した作品で見事に示しているのは、清澄

静謐の美であった。

その司馬氏訪問のとき、もう一つ無遠慮な質問を私は発した。あの膨大な資料の予想される司馬文学の制作の背後に、これを支える助手グループの働きがあるのではないかと、訊ねてみた。作家の答えは、すべての資料調査、閲読はじぶん一人でする、助手などは存在しない、という返事で、これも私にはまこと驚きであった。

司馬氏がじぶんの歴史観を語ったものに、「手掘り日本史」という小論がある。固定した歴史理論を斥けて、マルクス主義史学は「ずいぶん役に立つが、然しそれは歴史をさぐるための土木キカイであり、「考古学」の発掘が土木キカイでできないように、歴史は手掘りを加えないとうまくつかめない」と結論する。

絵画についても、歴史についても泥タンコの苦業、「手で掻き掘り」であり「手掘り」の仕事、ジカにぶち当たる作業だとかくかえし説いているのに注目したい。それはまた、司馬文学の制作が、安易、便利な道をもとめないで、ジカの手造りの仕事として、つねに渾身の作業であることを物語る。

しかしまた、作品から制作の汗くささをあらわに感じさせたり、過剰な感情の情景を表わしたりすることに、この作家がきわめて禁欲的であることも忘れてはならないだろう。須田国太郎の絵画に作家が心奪かれた——感傷や激情に流されない——知的意欲に導きだされる清澄と静謐とが、やはり司馬文学が最終に志すところであろう。

# 司馬遼太郎全集

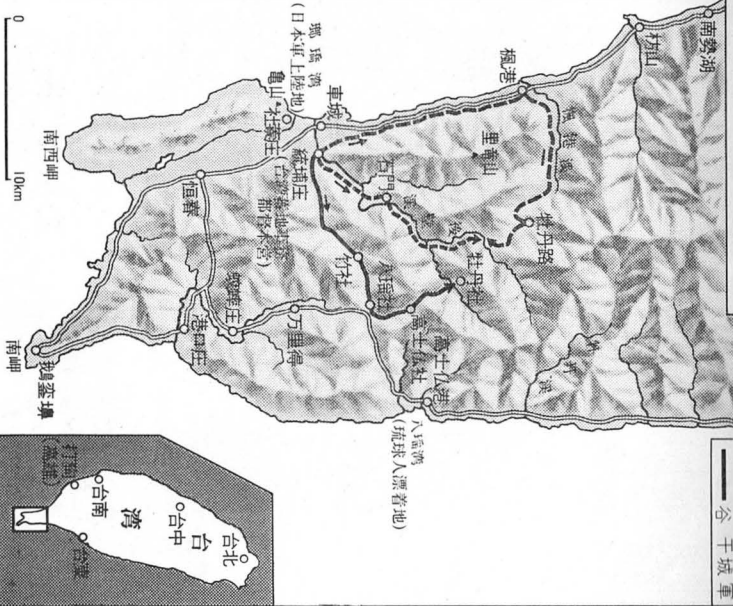
全50巻

- 第一期
- ① 梟の城
  - ② 上方武士道
  - ③ 風神の門地
  - ④ 竜馬がゆく一
  - ⑤ 竜馬がゆく二
  - ⑥ 燃えよ剣
  - ⑦ 新選組血風録
  - ⑧ 尻咲え孫市他
  - ⑨ 功名が辻
  - ⑩ 国盗り物語前編
  - ⑪ 国盗り物語後編
  - ⑫ 北斗の人
  - ⑬ 宮本武蔵他
  - ⑭ 俄浪華遊侠伝他
  - ⑮ 関ヶ原一
  - ⑯ 関ヶ原二
  - ⑰ 豊臣家の人々
  - ⑱ 十一番目の志士
  - ⑳ 風の武士
  - ㉑ 新史太閤記
- 第二期
- ㉒ 播磨灘物語一
  - ㉓ 夏草の賦
  - ㉔ 戦雲の夢
  - ㉕ 峠一
  - ㉖ 峠二・酔って候
  - ㉗ 最後の將軍他
  - ㉘ 義経
  - ㉙ 妖怪・花の館他
  - ㉚ 歳月・殉死
  - ㉛ 坂の上の雲一
  - ㉜ 坂の上の雲二
  - ㉝ 坂の上の雲三
  - ㉞ 世に棲む日日
  - ㉟ 城塞一
  - ㊱ 城塞二
  - ㊲ 胡桃に酒・故郷
  - ㊳ 忘じがたく候他
  - ㊴ 花神一
  - ㊵ 花神二・斬殺
  - ㊶ 慶応長崎事件他
  - ㊷ 評論隨筆集
  - 付・年譜
  - ㊸ 十一番目の志士
  - ㊹ 評論隨筆集(続)
  - ㊺ 人間の集団について
  - ㊻ 街道をゆく一
  - ㊼ 街道をゆく二
  - ㊽ 街道をゆく三
  - ㊾ ひとびとの覚音
  - ㊿ 評論隨筆集(続)

鹿児島県要図



台湾出兵要図





# 司馬遼太郎全集月報 37

## 言語についての感想 一

ホージェン族と熊野炭くまのずみ

司馬 遼太郎

モンゴルは、二つの国にわかれていた。一つは、モンゴル高原という広大な空間を占める人民共和国で、ソ連の影響下にあり、いまひとつは内蒙古で、ここは中国の自治州である。

いまはどちらも近代化したために言語事情が変わったが、私が習ったころのモンゴル語は、やさしいことばだった。

「四百語ほどの単語をおぼえておけば、包で暮らせる」と、諸事たかをくくるのが好きな先輩からいわれ、匈奴の子孫のことはをならうことに過大な期待をもっていただけに、志が萎える思いがした。食べる、眠る、風が吹く、風邪をひいた、

羊、馬、駱駝、牧草の名、犬をつないでくれ……そういう日常生活単語をあつめると、四百か、多くて六百ぐらいにちがいない。たとえそこで土着しても、四百語だけで生涯がすごせる。

司馬遼太郎全集  
第三十七卷月報  
第二期第五回配本  
1983年8月

### 目次

言語についての感想 一	司馬遼太郎
天山にて	鈴木肇
司馬先生とみどり夫人	安田幸子
地図(九州要図)	
地図(熊本市街図)	

株式会社 文藝春秋  
東京都千代田区  
紀尾井町3-23

ついでながら、モンゴル語の構造は日本語とおなじだから、文法を覚える必要はないのである。

そのころ、私のいた学科は、学校がモンゴル語を習得する負担が軽いとみていたのか、中国語とロシア語の習得を同時に課していた。ロシア語は文法がむずかしくてつらかったが、その点、モンゴル語はざっとした総括でいえばおなじ語族(アルタイ語族)に属しているから、覚える上で快感があった。ヨーロッパのある国の学生が他のヨーロッパ語を習得するときにはこういう快感があるのではないかと思ったりした。

この稿の主題は「単語四百」ということについてである。そういうことというとうと、当時のモンゴル草原だけでなく、たとえ二百年ぐらい前のヨーロッパで、アルプスの斜面で羊を飼っていた人々も、ピレネーの山の中できこりをしていたひとびとも、それだけの単語で生涯をすごしていたにちがいない。

こんにちでも、家族のなかでは、多くの場合、そうである。高度のしごとをしている人でも、休日に家でごろごろしているときは、百種類ほどの単語も使わないのではないか。ときに、

文脈すらとのえず、未開語のように意思を伝達する。「水」と名詞だけいえば、コップ一杯の水が運ばれてくる。ひどい場合は「お風呂に入る？」と問われて、ただうなずいたりする。ここまでくると、他の哺乳類とあまりかわらないところまで言語の機能を低下させている。

というより、大脳の中の言語の機能を休養させている。

べつ面からいえば、休養させねばならないほど、言語というのは緊張を必要とするものらしい。言語は、いうまでもなく人間が生物としてよほど進化して——大脳が発達して——から獲得したものである。だから休息中はなるべく言語を節約しているともいえる。呼吸機能とはちがうのである。もつとも呼吸をするように喋りつづけている、という人もいるが、その場合、わざわざ言語表現を必要とするほどの主題もなく喋っていることが多く、精神的緊張をほぐすためか、逆に快感を感じているためか、いずれにしてもこの主題の例にはならない。

私の若いころ、もし「満州」にゆくことがあればそのひとつとに会いたいとおもった民族に、ホジエン族があった。総数わずか六百人といわれている稀少な民族で、かつて漢民族から、「魚の皮を着た鞆靴人（魚皮鞆子）」

などといわれていた。かれらは、すくなくとも今世紀のある時期まで鮭の皮のずばんをはき、黒竜江や松花江のほとりにすんで、鮭や魚をとって暮らし、その社会も小さく、家族単位程度しかひろげず、従ってその言語も日常語だけでませ、生涯、

の単語の数でらくらくと生涯暮らせた。まことに気楽なものであった。

ホジエン族の変化をひとごととしておどろいていられないのである。江戸期がおわったということは、大変なことであり、その後の一世紀余の日本人は、ホジエン族の変化以上の激変のあげくこんにちまできた。

もつともここで考えておかねばならないのは、江戸期の農民がホジエン族的な言語生活であったかどうかということである。

自給自足的な江戸時代の山村（ホジエン族も自給自足だった）から低地に降りてきて都市近郊の農村に住むと、そこには商品経済が、地域によってはうつつすらと、べつな地域では濃厚に浸っていた。ある地域では、農民といっても商品生産者としての異質な半面をもつていて、半ば商人化していた。

商業は、人間の社会をいやおうなしにひろげてしまう。

それに、商業は、人間に初歩的な抽象というものを教える。たとえば、紀州南部（熊野）の山村を舞台に考えたい。ここは耕地がすくなく、ひとびとは山村に依存してくらしてきたが、しかし孤立した自給自足社会ではなく早くから商品経済に入りこんできて、いわゆる「人智が発達」していた。熊野では、江戸期の他地域にもまして道具類などを工夫し、改良する能力に富むようになった。山村のひとびとをこのようにつくりあげた要素のひとつは、木炭である。

単語の数も千ほどにすることなくすごしていたはずである。ホジエン語も、私ども日本語とおなじ文法のツングース語の一派で、おそらく抽象語はなかったにちがいない。私どもが家族内では抽象語はほとんどつかわないように、ホジエン人の生涯もそのようであったはずである。

物の本によると、こんにちのホジエン族は、『老子』にいう小国寡民という空想的とまでいえる社会からぬけ出して、中華人民共和国という近代的な広域社会の構成員に組み入れられたために、小国寡民「式ののんきなホジエン語を忘れざるをえなくなった。中国側は少数民族対策としてその言語文化の保存をたてまえてしているが、広域社会の構成員（つまり国家に対して権利義務をもつ人民）になったために、ホジエン語では政治、法律、思想などを表現することができず、従って中国語を身につけるをえないのである。でなければ、生産大隊という広域の政治経済社会の単位のなかで自分自身を社会に機能させることができない。黒竜江の対岸のソ連領にいたるホジエン族も、とつくのむかしにその言語はロシア語だけになり、ホジエン語は消えたといわれている。近代というもののおそろしさというのは、言語を改変したり、ときに失わせてしまうものである。

私ども人間は、言語体系によって世界を把握している。その言語量は、私の五代前ぐらいの江戸時代の山村の農民からすれば、気の速くなるほどにぼろ大なるものである。江戸時代の山民は、そのつもりでいようとすれば、かつてのホジエン族ぐらい

自給自足経済なら、木炭でありさえすればいい。ところが商品経済になると、熊野で要求される木炭は備長炭である。

——当店はびんちょう炭を使っています。

という店頭のはりがみを、いまでも東京の蒲焼屋さんなどで見かける。江戸期の江戸でもそうであった。

備長炭は熊野に多いウバメガシという樫の一種を乾留してつくる。白炭ともいい、打ちあわせると金属音に近い音が出る。ふつうの木炭（黒炭とよばれる）のように一時的に高い火力が出て持続しないのとちがいが、温度は低いが持続する。このため蒲焼だけでなく、江戸の高級料亭や大名屋敷ではこれをつかった。

木炭でさえあればいいというのは、粗放な経済社会である。備長炭ともなると、「物」から品質を抽出して考えねばならない。また、寸法をそろえねばならないから「物」を計量的に考えるようになる。すべてが、いわば知的になってくる。その上、紀州藩が、財政的にこの備長炭の上に乗りがぶさってきたから、生産者も仲買人も税ということを通じて政治を考えるようになる。備長炭は、主として熊野の新宮湊から紀州廻船の手で江戸へ送られた。山中で炭を焼く人々の意識の中の地図にはつねに江戸があり、江戸での品質の評判があり、相場の上下があった。

右のようにみると、製造にもなう技術用語が流通にもなう経済用語が、豊富に山中でつかわれた。炭焼きの人が家族内にいるときは単語四百で済むが、一個の木炭乾留技術者として山中にあるときは語彙の数もふえざるをえない。備長炭の仲買人に

いたっては、たとえ口語でも文脈をととのえて文章的表现をせねば、取引上の齟齬をまねくために、論理を通し修辭を加えるといったふうで、言語生活上の緊張はきわめて高いものになった。さらに新宮あたりの炭問屋となると、口頭言語よりも、商業行為の肝腎の節目々々は文章表現しなければならぬ。江戸期は、知識人からみればたかが炭とみられがちな世界でさえ、文章表現の練磨や習熟という高次の言語現象がみられる。(つづく)

## 天山にて

鈴木肇 (NHKシルク)  
ロッド取材班

天山山脈は中国北辺を西に走り、ソビエト領中央アジアへ連らなっている。山脈の南側は恐るべき乾燥の支配するタクラマカン砂漠、北側は、一転して緑のじゅうたんをしきつめた大草原である。一九八〇年七月、私は、司馬遼太郎さんに同行いただいて、天山山脈北麓をたずねた。シルクロード天山北路の取材である。

道は、中国新疆ウイグル自治区の哈密、古代伊吾の地から、天山を北へぬけ、北麓の草原を一路西進している。西へおよそ千キロ、中ソ国境に近く、セリム湖がある。標高二千メートルに位置し、周囲およそ百キロの大きな湖である。

夏の天山北麓は天の地であり、セリム湖は天の池である。このゆたかな緑の広がる湖畔で天山の遊牧民たちは、一年に一回

交易会を開く。馬具・長靴・ロープ・石鹼・布地など、遊牧民の生活必需品が、湖畔に張られたテントのなかに無造作に並べられている。

「ほう、こんなものもありますなあ」

司馬さんの目にとまったのは、ピカピカに磨きあげられた銀製のサモワールである。値段は羊五頭分、現金なら二百元。二百元といえば、中国人のサラリーマンの三、四ヶ月の月給に相当する。馬上からながめていたハザックの男が、サモワールを買った。男は小脇にかかえると、馬に一鞭、草原のななたに消え去った。司馬さんは、つぶやいた、

「風ですな、あのハザックは」

司馬さんの興味は、交易会の品々ではない。交易会に集まった民族である。ウイグル族、キルギス族、ハザック族、タジク族、さまざまな顔つきの男女が、さながら民族のパザールといった感じで集まっている。

「ニイ・シ・シェンム・ミンツ(あなたは何族ですか)?」

司馬さんは、手あたり次第に聞いて回る。

「どんな民族をさがしていらっしゃるのかなあ」

と思いついて行くと、羊の肉を売っているテントで、

「シボ。ヨウ・メイヨウ(錫伯族はいませんか?)」

すると、なからから青年がのり出して来て、

「ウォーシ。シボ(私は錫伯族です)」

「ニイ・マンチューフワ・チータオマ(満州語を知っていますか?)」

「チータオ・チータオ(知っていますとも)」

「ほう、満州語を、まだ覚えてるんですね、彼は」

錫伯族というのは、十八世紀、清朝政府が新疆征討のためにかり出した満州族の一支族で、その時以来、イリ地方を中心に遊牧を続けてきた、ごく数の少ない民族である。「彼は、満州語をまだ覚えてるんですね」と、先生が感心されたのは、彼らが、遠く満州(現在の中国東北地方)をはなれて二百年、ひっそりと、しかし、頑固に満州語を語りつづけて来たことへのおどろきであったようだ。

「先生は、どうして少数民族に興味をお持ちなんですか」

「さあ、どういっていいか、理由はよくわからないんですが、まあ、あえて言えば、彼らには頑固な人が多いでしょう。世の中がどう進んでも、今なお自分たちの生活をし、自分たちの言葉を守りつづけている。そこに、品格を感じるんですね、彼らに」

私は、その時、ふと思った。「ガンコ、自分の言葉、品格。ひよっとしたら、目の前の司馬先生自身も、少数民族ではないか」と。天山の遊牧民は、自然の大空間に住む。司馬さんは、知的大空間に生きる。両者のちがいは、ただその一点である。天山での印象である。

## 司馬先生とみどり夫人

安田幸子

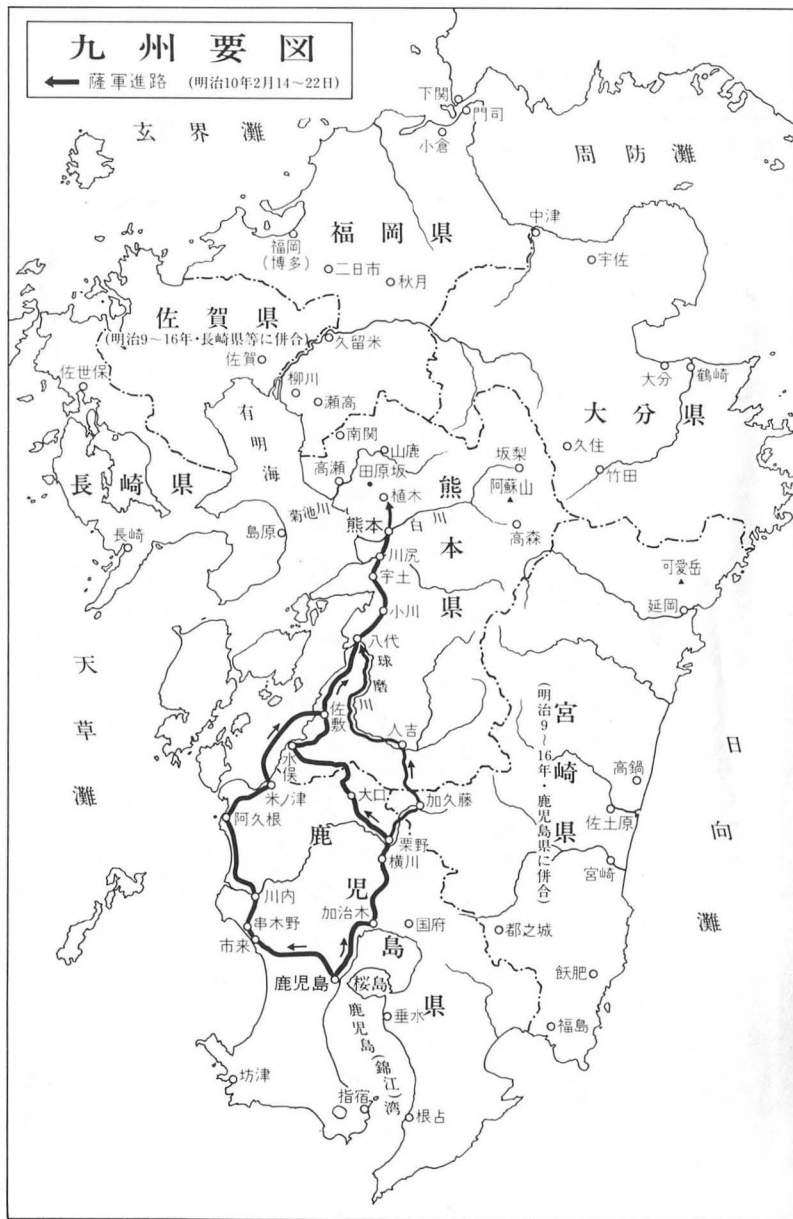
司馬先生のおつきあいは、亡夫、安田章生が在世中の、昭

和二十九年に始まるから凡そ三十年となる。司馬先生は、サンケイ新聞社文化部の記者をしておられ、夫は当時、大阪樟蔭女子大学の教師で、短歌誌「白珠」を二十一年に父と創刊したばかりの時であったから、先生は数え年三十二歳のお若さ。夫は三十八歳であった。夫人みどりさんと、昭和十七年十月、みどりさんがまだ樟蔭高等女学校の一年生、私がほやほやの教師となつた時の生徒だから、もう四十一年にもなる。みどりさんは強い近眼だったので、背が高かつたが前の席で、食い入るように話を聞いていたが、作文がずばぬけてよく出来た。みどりさんは、樟蔭女子大の前身、樟蔭女専での夫の教え子でもあり、「白珠」へも出詠していたので、私共には、まるで娘のような感じであった。これらのいきさつは、さきに先生が、夫の歌集『旅人の耳』の跋に、くわしくお書き下さっている。みどりさんも、女専を卒業後、サンケイ新聞社に入社されたので、後年の司馬先生、すなわち、当時の福田定一さんと、みどりさんのお蔭で、夫はサンケイ新聞にしばしば執筆の機をお与えいただいたのである。

あれはいづごろであったか、夫が近鉄電車で、お二人にばかりお会いし、「僕を見ると、二人ともばつと赤うなつて、えも言われぬ風情やつた。僕、そしらん顔してた」と、実に嬉しそうだった。後に、お二人が結婚されたと聞いた時、夫婦で、「なるほど、なるほど」とうなずき合つて、おおいに祝福した。かくしてご縁は深まつたが、超多忙の御夫妻と、多忙の私共との交流は、淡きこと水のごとき、状態を保ちつつ、何かにつ

# 九州要図

← 薩軍進路 (明治10年2月14~22日)



けて念頭を去来する、という問柄となつたのである。  
 先生が作家になられてからの御活躍は、あれよあれよと言うばかりで、今や文豪の名をほしいままにしておられる。夫は「司馬さんに対しては、目だけはいつでも笑わない。対象を見据えて、徹底的に観察する鋭い作家の目」と言い、電流のような何かを、そのころから感じとっていたようだ。又、晩年、「お若いころの司馬さんには、司馬さんなりの悲しみがありません。ありだつたと思うが、一人わが道をゆく作家になられて、それを昇華されたのだと思う」と、これは自分に引きつけての感想と思われ、言葉を洩らした。そして、先生の古今東西にわたる博学と、多くの名作が、余裕綽綽たる風韻から生まれ出ること驚嘆の声を放っていた。先生の目は、対象に食い込みつつ、心は対する者に興奮を与え、それは再び先生に反応して、言葉の滝と化して聞き手の頭上を打つ。先生は、モンゴルの草原を疾走する若馬か。この若馬に添って懸命に走るみどりさん。走り続けて何年になられたか。  
 みどりさんは、大きなふかふかしたソファ。このソファにくつろぐ安堵感が、先生の活力の一つになっている、と、私は思う。  
 御夫妻を囲んでの席で、先生は滯蓄をかたむけて話に熱中し、みどりさんはもの静かに杯を含み、紫煙をくゆらせる。座の雰囲気は盛り上り、陶然とし、堪能したところおい、「ではこの辺で……」と、みどりさんがまとめて、お開きとなる。遊びに没頭しながら客をもてなす阿伝の呼吸の見事さ、楽し

さ。  
 私は、夫の生存中から、病中、没後を、御夫妻のこのあたたかなお招きとお心づかいにあずかって精神を再生しながら、やっと今日に至つたように思う。先生を仰ぎ見て御指導を頂き、みどりさんには、師弟その所をかえて、御意見をうかがったり、甘えたりしている。たんぼぼや菜の花のお好きな先生の一面にふれさせて頂くことによつて、たんぼぼの咲く野道を、子供にかえつて歩いてゆくような安らぎをも覚えていた。

**文藝春秋六十周年記念**  
**司馬遼太郎全集** 第二期 全18巻 定価一八〇〇円

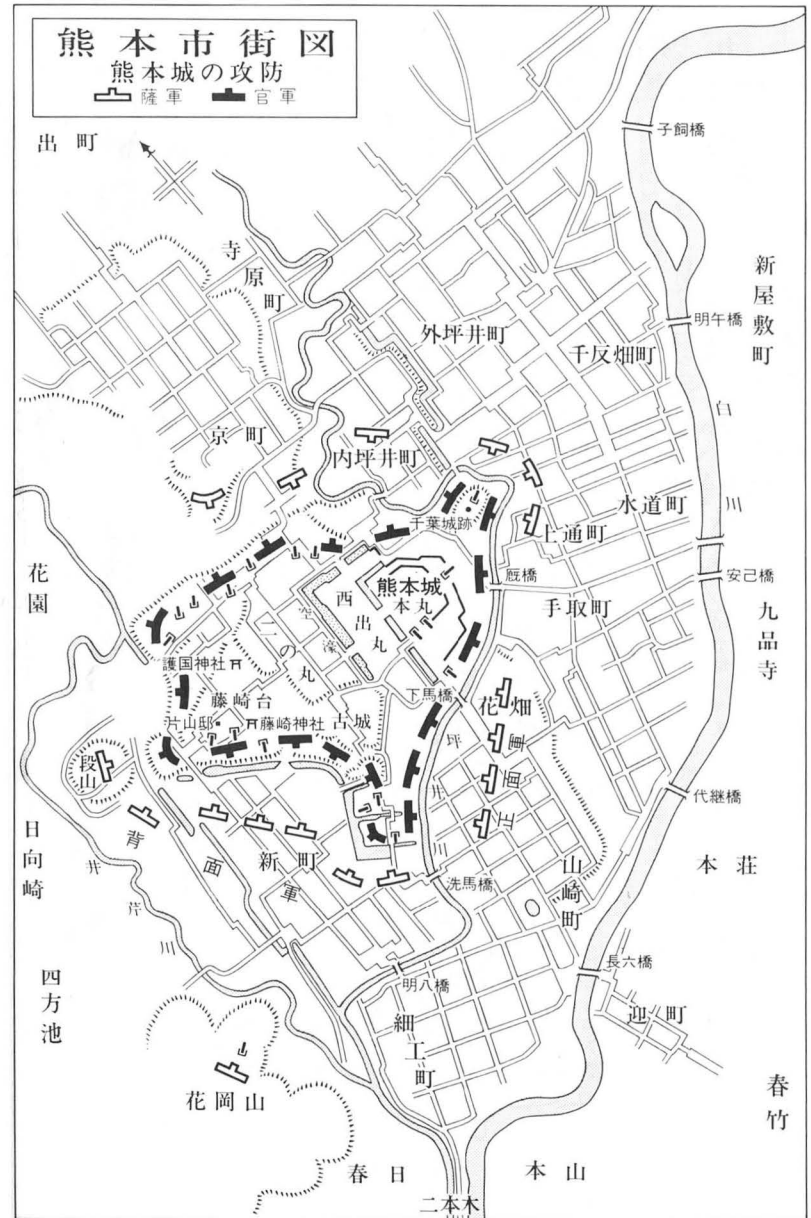
33 播磨灘物語一 39 空海の風景・鬼灯 46 項羽と劉邦二  
 34 播磨灘物語二 40 胡蝶の夢一 47 人間の集団について  
 35 翔ぶが如く一 41 胡蝶の夢二 48 街道をゆく一  
 36 翔ぶが如く二 42 菜の花の沖一 49 街道をゆく二  
 37 翔ぶが如く三 43 菜の花の沖二 50 ひとびとの聲音  
 38 翔ぶが如く四 44 菜の花の沖三 評論隨筆集(続)  
 45 項羽と劉邦一

38 翔ぶが如く四  
 次回配本九月十日

# 熊本市街図

## 熊本城の攻防

薩軍 官軍



# 司馬遼太郎全集月報 38

## 言語についての感想 二

### 文章語の成立について

司馬 遼太郎

あるとき、大阪から京都まで人と同乗した。四十半ばの篤実な中国仏教史の学者で、車中、どのぐらいの原典を読むのですか、となかば同情しつつ、きいてみた。

「いえ、中国史は原典の量でいえば楽です。その点、日本史の人達は大変です。文章資料がくらべものにならないほどぼう大ですから」

と、そのひとがいった。

中国の場合、文章は、統治の道具であり、官僚は自分の行政管轄のことについて營々と作文し、上奏、上申した。野にある読書人も、さまざまなる事物について文章を書いた。残ってればぼう大なはずだが、治乱興亡がはげしかったせいか、ほとんど散逸した。おかげで読むべき文章資料が多くない、という。

司馬遼太郎全集  
第三十八巻月報  
第二期第六回配布  
1983年9月

### 目次

言語についての感想 二	司馬遼太郎
忘れてほしいこと	姜 在彦
新聞記者「福田定一」のこと	永田 照海
地図(城山周辺図・九州要図)	
地図(田原坂周辺図)	

株式会社 文藝春秋  
東京都千代田区  
紀尾井町3-23

この稿は、文章日本語の歴史をふりかえっている。上代の単純な社会での言語の機能は、生活の用を果たすだけでよく、それ以上に複雑な修辭や論理を必要としない。私どもの先祖である平安時代の農民は、

「めしは？」

と問われれば、

「食べた」

と答えるだけで済んだ。こういう暮らしのなかから、農民による文章語がうまれることはなかった。

しかし京都には、貴族という遊閑階級がいた。そのなかから『源氏物語』をはじめとする王朝文学がうまれたのは、世界的な場においても、奇蹟であったといえる。

十二世紀後半に成立した鎌倉幕府は、農民の政権であった。かれらをもつて「武士」などとよぶのは定義のあいまいな呼称で、公家からみれば律令農民であり、かれらが私的に結束し、ほしいままに武装し、律令の土地制度の矛盾のはざまに成長して土地制度を働く側から恣意的に合理化した非合法政権といっている。しかしながら、こんにちまで脈絡のつづく日本社会史

は、このときからはじまったといえる。  
この鎌倉幕府の官修の記録が『吾妻鏡』(東鑑)で、文章は残念ながら和文ではなく、和臭のある漢文である。官の記録は漢文という京の伝統が、鎌倉にひきつがれた。

しかし鎌倉の世は庶民(公家以外のすべて)がせりあがった世であるだけに、庶民の耳目のための文章語が編み出された。たとえば、『平家物語』の成立である。ただし、徹頭徹尾文章意識の上に立っている漢文とはちがいで、『平家』という長大な叙述は、あくまでも琵琶法師が琵琶の伴奏を入れて語る、ということが文章発想上の意識であり、目的であった。それにしても、日本語においてこれほどながながと独り語りできる表現法が完成されたのは『平家』の功績といっている。

この時代、語らずに読むだけ为目的とした文章も成立した。史論『愚管抄』である。筆者は慈円(一一五五―一二二五)で、関白九條兼実を兄にもち、三十代で天台座主になり、歌人としても知られた。日本史を上代から説き、立場上かつての公家政治もみとめつつ、それを倒した武家政治についても「末代の道理」としてあわせてみとめており、言おうとするところは、慈円という知識人がもつ茫とした観念(上等にいえばかれの政治意識を反映させた歴史哲学)というべきものであった。

『愚管抄』は、そのなかで筆者も「仮二書ツクル」といっているように、漢語まじりの日本語で書かれ、しかも漢文訓みくだし式の日本語ではなく、とらって『平家』のように聴き手の情感に訴える語り調でもない。叙事要素が濃厚ながら一個の観念

をくりかえし述べ、読者の知的な部分の反応を期待しているという点で、十三世紀の文章日本語の一祖型といっている。それだけに『愚管抄』の日本語は難解である。その理由は、いつに未熟にある。慈円の文章力が未熟なものがないにひとしいために、大げさな慈円みずからが文章としての言語を創始せねばならなかったのである。

慈円は、  
「なぜ真名(漢文)で書かず、仮名(日本語)で書くか」  
という命題で書いているくだりがあるが、後世の私どもには何をいっているのかわかりにくい。私など『日本古典文学大系』の注釈のたすけを借りても意味がはつきりしない。

十三世紀最大の教養人で、かつ文学的才能に富んだ慈円も、日本語文章を手作りすることよほど苦しんだらしい。誤読かもしれないが、私が理解したひとつだりに、つぎのような一種の文章論がある。大意は、仮名で書くのはひろく世間の人々に本当の物語を知ってほしいためだ、ということらしい。

仮名で(日本語の文章で)このように書こうと思いたったのは、物語を知っている人がいないからである。……ところで仮名だけで書くと、日本語の本来の性格(本文では、後述詞ノ本体)上、漢文的表現から遠くなる。そこが世間の人は、仮名で書いてもなお読みにくい、とし、またつまらない、とする。(以下、彼は例をあげる。本文のまま)ハタト・ムズト・

シャクト・ドウト、ナドトイフコトバドモ也。是こそ此ヤマトコトバノ本体ニテハアレ。

はたと気づくとか、むずと組む、どうと倒れるというのは、いづれも擬態・擬声語で、これを多用する言語は、論理・修辭のうえで未発達段階にあるといわねばならないが、それを「ヤマトコトバノ本体ニテハアレ」というのは慈円の言いすぎのように思える。漢文の副詞・形容詞に擬態・擬声語がふんだんにあることを慈円はわすれているようだし、平安期の物語を見ても、漢文とくらべて日本語の本来の性格だとは感じにくい。しかし当時の日本人は、日常会話のなかで、こんなにちの劇画によくつかわれるようなオノマトペをよくつかっていて、慈円も日ごろ、「まことにわが国のことばは卑しい。唐土にはこういう物言いはあるまい」とおもっていたのであろう。ともか



くも『愚管抄』は四苦八苦の手作り文章語であることにはまぢがいな。慈円が死ぬころ幼児だった道元も、十三世紀の日本で、文章日本語を手作りした人である。その大著『正法眼蔵』は、

当時の日本語で形而上的分野を表現しきった最初の巨大な文章遺産といっているが、言いまわしまで強引に手作りで作ってのけたところがあり、後世の私どもにしばしば意味が通じにくい。このために他に影響をあたえるところがすくなく、文章としては孤立しているといっている。

ややくだって、室町期は、日本の散文の共有性がはじめて確立する時代である。

そのための一種の文章学校の時代でもあった。『源氏物語』の積講をきくことが、中央の貴族や、地方の守護・地頭にとって必須の教養的行為とされた。連歌師宗祇の生活の資のひとつは、『源氏物語』の講義にあった。一方、琵琶法師によって『平家』が語られつづけた。さらには謡曲も口誦による散文として考えてよく、次いで口誦の台本である『太平記』がひろまって、その文体に真似さえすれば一応事物を表現することができるようになった。とくに『太平記』が、江戸初期までいかに書かれる大名の興亡記につよい影響をあたえる。江戸期は、あらゆる階層が文章を書いたといっている。ただ、江戸期の文章日本語は叙事・叙景に長じているが、観念的な分野まで覆いきる日本語の文章を作った人は多くない。江戸後期では本居宣長と上田秋成のほか数人があげられるし、末期には何人かみごとな例があるが、問題は明治維新のすぐきである。それらの共有財産がいっさい使用不能の過去のものになってしまった。(つづく)

忘れてほしいこと

姜 在 彦 (大阪大講師)

もう七、八年前のことだろうか。当時鄭詔文さんの朝鮮文化社が『日朝関係辞典』を企画していて、その編集委員には日本人三名、朝鮮人三名が名を連ねていた。辞典そのものの企画は立ち消えとなつてしまつたが、或る日の晩遅くまで京都の町を飲み歩いて、私は司馬さんとタクシーで、大阪まで帰つたものだった。

そのとき司馬さんをはじめて、ご自宅までお送りしたのであつたが、そこはいま東大阪市というところの、布施市の永和であつた。いうまでもなく中小企業の町であり、庶民の町である。普通司馬さんほどの大文豪ともなれば、関西であれば芦屋とか、閑静な高級住宅地に大邸宅を構えるものと思つていた私の先入観は、みごとにくずれ、一種の畏敬の念に打たれたことを、いまでも鮮明に覚えてゐる。

恐らく文筆家としては、東京中心の中央集権的な出版文化のなかで、東京かその近辺に居られる方が、何かとプラスの面が多いはずなのに、依然としてかれは大阪に居坐り、今も東大阪市の八戸ノ里に居られるそうだが、司馬さんのそういう、気どらない庶民性が私は好きだ。

たまたま二、三年前に、司馬さんの奥様みどりさんと、私の旧い知己で、梅田で宝石商をしている玄文叔さんの奥さんとが

小学校、高等女学校の同期で、幼なじみであることを知つて以来、年に一、二回は家族ぐるみで梅田の北新地界隈を飲み歩いたり、ときには一泊で珍珠のご馳走を食べに行くこともある。過飲というよりは、どちらかというと暴飲する方の私に、司馬さんはかなわない。そのときはもつぱら、みどりさんが相手を。しかし司馬さんはその雰囲気には溶け込んで、けつして酒席を退屈させることがない。談論風発、その弁舌はさわやかなうえに、やさしい気くばりがある。

司馬さんは記憶力抜群で、当方は忘れてしまつた酒のうえでの放言を、ちゃんと憶えていて、びつくりさせられることがある。人間というのは、余程成算がないかぎり、心のなかにしまひ込んであることを言つてしまつたばかりに、心の負担になることがある。

或る酒席で私はい、わが生涯の大半をこの日本でお世話になつたことだし、西洋人の日本論がブームになつていて、それとは違つた眼で、日本論を書くことをさいごの仕事にしたい、といつてしまつた。ところが返つてきたことばも、意外であつた。私もさいごの仕事として、朝鮮論を書きたい、と。

私はしばしば、司馬さんとのさりげないやりとりのなかで、朝鮮または朝鮮人にかんする、じつに単純明快でありながら、きわめて本質的な指摘に射すくまれることが多い。

私の興味を引くのは、司馬文学もさることながら、その史学のことである。これは勝手な推測だが、どうやら司馬さんの執着は、農耕社会の中原文化を垣根越しににらみながら、その周

辺を移動しつづけた遊牧民や騎馬民のことらしい。してみると原初的には騎馬民である朝鮮人が、太古の昔に朝鮮半島という袋小路にはいつて農耕と定住を余儀なくされ、そのうえに中原文化がある面では中国以上に根をおろすという、この二重構造の生活や文化のありようが、朝鮮にたいする並々な関心のルーツかも知れない。もしそうだとすれば、東洋史学の大家という人でさえ、多くのばあひ中国文化のたんなるコピーとして朝鮮文化を理解しているなかであつて、じつに卓越した発想である。

それにしても私は、先の軽率な発言が、いたく心の負担になつてゐる。「在日」が長くなるほどに、私の内なる朝鮮的なものが風化してきて、日本がよく見えなくなつたことにもよろうが、何よりも日本・日本人というものを知れば知るほど、われわれには踏み込めない「聖域」のようなものがあるような気がしてならないからである。是非このことだけは忘れてほしい、と念じてゐる。

### 新聞記者「福田定一」のこと

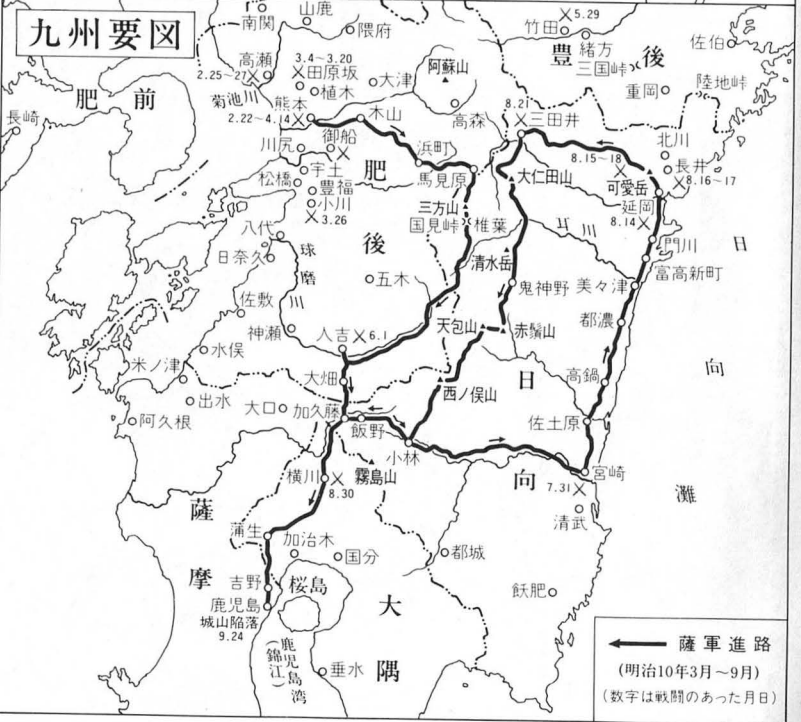
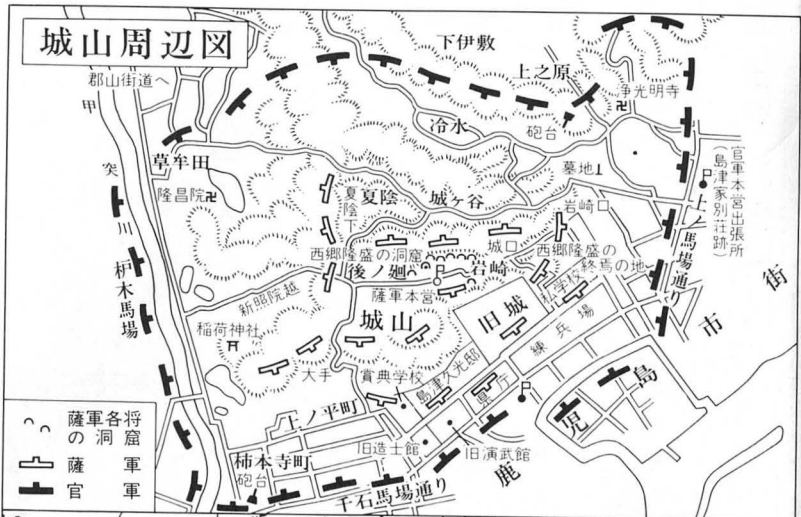
永田照海 (サンケイ新報 副社長)

司馬遼太郎さん、本名は福田定一という。司馬さんがサンケイ新聞の記者時代はもちろん福田定一であつた。司馬さんとの出会い、というより福田記者とのはじめての出会い、忘れも

しない昭和二十三年六月二十九日の早朝、戦後の大地震の一つである福井大地震直後の福井市内、つまり取材現場であつた。当時、福田記者はサンケイ新聞京都支局員、私は大阪本社の社会部員。前夜、福井市全滅の第一報とともに、本社と京都からそれぞれ現地へとび、列車や救援トラックを乗りついであげく、ようやく早朝、瓦礫と化した福井の町にたどりついたのである。

さて、町に入ったもののおまりの惨状に何から手をつけてよいやらわからず、ウロウロしていたところ、向こうの方から社の腕章をつけた青年がやつてきた。「本社の方ですか。ボク、京都支局の福田です」と人なつたこと笑顔で、ていねいに名乗り、「みんな同じことをやつてもしょうがない。君は県庁へ行つて全体の被害を書く。ボクは町を歩いて町ダネを集めます。落ち合う先は武生の郵便局、あそこは残つていたので」とテキパキ分担をきめ、われわれは右と左に別れた。「支局の人にしては実に手ぎわのあざやかな男だなあ」と感心したものである。

ところが司馬さんの口にかかるのと話が逆になるから面白い。「君は県版を主に書け。オレは社会部だから本版を書く」と、永田のやつ、本社風を吹かしよつたんや——司馬さん一流のユニモアだが、当時の青年は初対面の場合、たいてい「きやつは何者だ」とにらみ合い、さぐり合いからコトがはじまるものである。多少は司馬さんのいう空気がたつたかも知れない。今にして思えば汗顔のいたりであろう。さて、数日かけまわつて一段落し、取材陣は大阪に引き揚げることになつた。これというまとまつた記事も送れず、心晴れての帰還ではなかつたが、福田



記者がこんな提案をした。「京大に佐々憲三という地震博士がいる。この人なら福井地震の科学的分析が聞けるやろ。はや復興のつち音などという月なみ記事はごめんやからな」

名案とばかり福田記者と私は京都で途中下車して京大の佐々研究室を訪れ、百行くらいの記事にまとめあげた。これはなかなかの出来ばえで、ようやく面目をほどこした次第だが、念のためサンケイ本社の資料室でしらべると、ちゃんと永田、福田記者の署名入りで、この記事に再会することができた。

その後、司馬さんは本社の文化部記者となり、文化部長となったが、いつころから小説を書きはじめたのかは知らない。何度もしよに取材をしたが、彼は一ことも言わなかった。そのうち京都の宗教新聞に「梟の城」を連載し、それが直木賞となったときは、さすが目を輝かして話してくれたのを思い出す。

そのころだったろう。当時のサンケイ新聞社長長水野成夫さんから「サンケイに本格的な連載小説を書け」と指示された。他の仕事は一切やるな。全力をあげてくれ——といわれたと、真剣な表情だった。

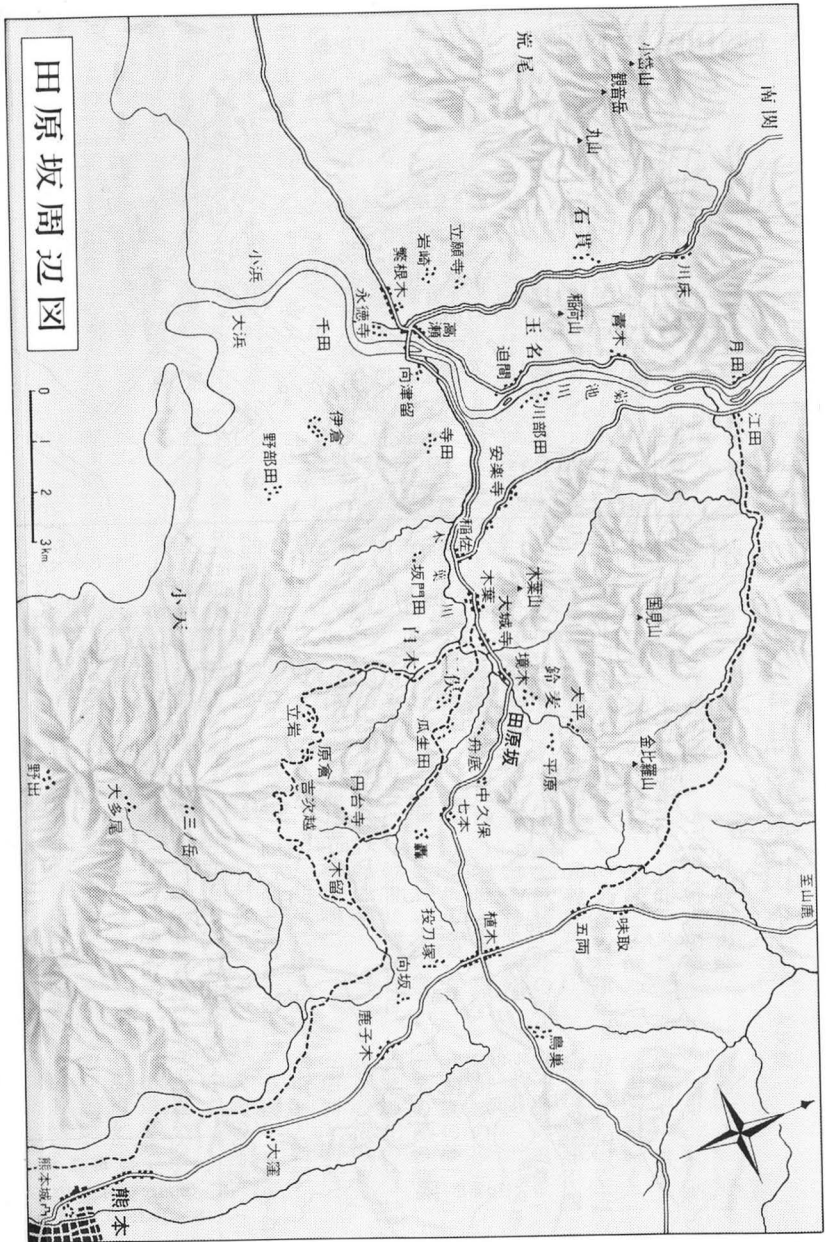
こうしてはじまったのが作家司馬遼太郎を不動のものとした第一作「童馬がゆく」である。生き生きとした人物描写、たしかに、しかも独特の史観、流麗な文章。社会部長だった私は一般読者より一日早くグラ刷りの段階でむさぼるように読んだ。

司馬さんの好きな「旋回」という言葉を使わせてもらったら、この一作で記者福田定一の世界は司馬遼太郎の世界へと大きく旋回していったのである。

# 司馬遼太郎全集

全50巻

- |            |            |
|------------|------------|
| 第一期        | 第二期        |
| ① 梟の城      | ① 夏草の賦     |
| ② 上方武士道    | ② 戦雲の夢     |
| ③ 風神の門他    | ③ 覇王の家     |
| ④ 竜馬がゆく一   | ④ 播磨灘物語二   |
| ⑤ 竜馬がゆく二   | ⑤ 最後の将軍他   |
| ⑥ 燃えよ剣     | ⑥ 義経       |
| ⑦ 新選組血風録   | ⑦ 妖怪・花の館他  |
| ⑧ 幕末       | ⑧ 妖月・殉死    |
| ⑨ 尻咲え孫市他   | ⑨ 坂の上の雲一   |
| ⑩ 功名が辻     | ⑩ 坂の上の雲二   |
| ⑪ 国盗り物語前編  | ⑪ 坂の上の雲三   |
| ⑫ 国盗り物語後編  | ⑫ 世に棲む日日   |
| ⑬ 北斗の人     | ⑬ 城塞一      |
| ⑭ 宮本武蔵他    | ⑭ 城塞二      |
| ⑮ 俄(浪華遊侠伝) | ⑮ 忘れがたく候他  |
| ⑯ 関ヶ原一     | ⑯ 花神一      |
| ⑰ 関ヶ原二     | ⑰ 花神二・斬殺   |
| ⑱ 豊臣家の人々   | ⑱ 慶応長崎事件他  |
| ⑲ 十一番目の志士  | ⑲ 評論隨筆集    |
| ⑳ 風の武士     | ⑲ 付・年譜     |
| ㉑ 新史太閤記    | ㉑ 播磨灘物語一   |
|            | ㉒ 街道をゆく一   |
|            | ㉒ 街道をゆく二   |
|            | ㉒ 街道をゆく三   |
|            | ㉒ ひとびとの覚音  |
|            | ㉒ 評論隨筆集(続) |
|            | ㉒ 人間集団についで |
|            | ㉒ 長安から北京へ  |
|            | ㉒ 項羽と劉邦二   |
|            | ㉒ 項羽と劉邦一   |
|            | ㉒ 菜の花の沖二   |
|            | ㉒ 菜の花の沖一   |
|            | ㉒ 胡蝶の夢二    |
|            | ㉒ 胡蝶の夢一    |
|            | ㉒ 鬼灯       |
|            | ㉒ 空海の風景    |
|            | ㉒ 翊ぶが如く四   |
|            | ㉒ 翊ぶが如く三   |
|            | ㉒ 翊ぶが如く二   |
|            | ㉒ 翊ぶが如く一   |
|            | ㉒ 峠一       |
|            | ㉒ 峠二       |
|            | ㉒ 最後の将軍他   |
|            | ㉒ 義経       |
|            | ㉒ 妖怪・花の館他  |
|            | ㉒ 妖月・殉死    |
|            | ㉒ 坂の上の雲一   |
|            | ㉒ 坂の上の雲二   |
|            | ㉒ 坂の上の雲三   |
|            | ㉒ 世に棲む日日   |
|            | ㉒ 城塞一      |
|            | ㉒ 城塞二      |
|            | ㉒ 忘れがたく候他  |
|            | ㉒ 花神一      |
|            | ㉒ 花神二・斬殺   |
|            | ㉒ 慶応長崎事件他  |
|            | ㉒ 評論隨筆集    |
|            | ㉒ 付・年譜     |
|            | ㉒ 播磨灘物語一   |
|            | ㉒ 夏草の賦     |
|            | ㉒ 戦雲の夢     |
|            | ㉒ 覇王の家     |
|            | ㉒ 播磨灘物語二   |
|            | ㉒ 最後の将軍他   |
|            | ㉒ 義経       |
|            | ㉒ 妖怪・花の館他  |
|            | ㉒ 妖月・殉死    |
|            | ㉒ 坂の上の雲一   |
|            | ㉒ 坂の上の雲二   |
|            | ㉒ 坂の上の雲三   |
|            | ㉒ 世に棲む日日   |
|            | ㉒ 城塞一      |
|            | ㉒ 城塞二      |
|            | ㉒ 忘れがたく候他  |
|            | ㉒ 花神一      |
|            | ㉒ 花神二・斬殺   |
|            | ㉒ 慶応長崎事件他  |
|            | ㉒ 評論隨筆集    |
|            | ㉒ 付・年譜     |
|            | ㉒ 播磨灘物語一   |
|            | ㉒ 夏草の賦     |
|            | ㉒ 戦雲の夢     |
|            | ㉒ 覇王の家     |
|            | ㉒ 播磨灘物語二   |
|            | ㉒ 最後の将軍他   |
|            | ㉒ 義経       |
|            | ㉒ 妖怪・花の館他  |
|            | ㉒ 妖月・殉死    |
|            | ㉒ 坂の上の雲一   |
|            | ㉒ 坂の上の雲二   |
|            | ㉒ 坂の上の雲三   |
|            | ㉒ 世に棲む日日   |
|            | ㉒ 城塞一      |
|            | ㉒ 城塞二      |
|            | ㉒ 忘れがたく候他  |
|            | ㉒ 花神一      |
|            | ㉒ 花神二・斬殺   |
|            | ㉒ 慶応長崎事件他  |
|            | ㉒ 評論隨筆集    |
|            | ㉒ 付・年譜     |
|            | ㉒ 播磨灘物語一   |
|            | ㉒ 夏草の賦     |
|            | ㉒ 戦雲の夢     |
|            | ㉒ 覇王の家     |
|            | ㉒ 播磨灘物語二   |
|            | ㉒ 最後の将軍他   |
|            | ㉒ 義経       |
|            | ㉒ 妖怪・花の館他  |
|            | ㉒ 妖月・殉死    |
|            | ㉒ 坂の上の雲一   |
|            | ㉒ 坂の上の雲二   |
|            | ㉒ 坂の上の雲三   |
|            | ㉒ 世に棲む日日   |
|            | ㉒ 城塞一      |
|            | ㉒ 城塞二      |
|            | ㉒ 忘れがたく候他  |
|            | ㉒ 花神一      |
|            | ㉒ 花神二・斬殺   |
|            | ㉒ 慶応長崎事件他  |
|            | ㉒ 評論隨筆集    |
|            | ㉒ 付・年譜     |
|            | ㉒ 播磨灘物語一   |
|            | ㉒ 夏草の賦     |
|            | ㉒ 戦雲の夢     |
|            | ㉒ 覇王の家     |
|            | ㉒ 播磨灘物語二   |
|            | ㉒ 最後の将軍他   |
|            | ㉒ 義経       |
|            | ㉒ 妖怪・花の館他  |
|            | ㉒ 妖月・殉死    |
|            | ㉒ 坂の上の雲一   |
|            | ㉒ 坂の上の雲二   |
|            | ㉒ 坂の上の雲三   |
|            | ㉒ 世に棲む日日   |
|            | ㉒ 城塞一      |
|            | ㉒ 城塞二      |
|            | ㉒ 忘れがたく候他  |
|            | ㉒ 花神一      |
|            | ㉒ 花神二・斬殺   |
|            | ㉒ 慶応長崎事件他  |
|            | ㉒ 評論隨筆集    |
|            | ㉒ 付・年譜     |
|            | ㉒ 播磨灘物語一   |
|            | ㉒ 夏草の賦     |
|            | ㉒ 戦雲の夢     |
|            | ㉒ 覇王の家     |
|            | ㉒ 播磨灘物語二   |
|            | ㉒ 最後の将軍他   |
|            | ㉒ 義経       |
|            | ㉒ 妖怪・花の館他  |
|            | ㉒ 妖月・殉死    |
|            | ㉒ 坂の上の雲一   |
|            | ㉒ 坂の上の雲二   |
|            | ㉒ 坂の上の雲三   |
|            | ㉒ 世に棲む日日   |
|            | ㉒ 城塞一      |
|            | ㉒ 城塞二      |
|            | ㉒ 忘れがたく候他  |
|            | ㉒ 花神一      |
|            | ㉒ 花神二・斬殺   |
|            | ㉒ 慶応長崎事件他  |
|            | ㉒ 評論隨筆集    |
|            | ㉒ 付・年譜     |
|            | ㉒ 播磨灘物語一   |
|            | ㉒ 夏草の賦     |
|            | ㉒ 戦雲の夢     |
|            | ㉒ 覇王の家     |
|            | ㉒ 播磨灘物語二   |
|            | ㉒ 最後の将軍他   |
|            | ㉒ 義経       |
|            | ㉒ 妖怪・花の館他  |
|            | ㉒ 妖月・殉死    |
|            | ㉒ 坂の上の雲一   |
|            | ㉒ 坂の上の雲二   |
|            | ㉒ 坂の上の雲三   |
|            | ㉒ 世に棲む日日   |
|            | ㉒ 城塞一      |
|            | ㉒ 城塞二      |
|            | ㉒ 忘れがたく候他  |
|            | ㉒ 花神一      |
|            | ㉒ 花神二・斬殺   |
|            | ㉒ 慶応長崎事件他  |
|            | ㉒ 評論隨筆集    |
|            | ㉒ 付・年譜     |
|            | ㉒ 播磨灘物語一   |
|            | ㉒ 夏草の賦     |
|            | ㉒ 戦雲の夢     |
|            | ㉒ 覇王の家     |
|            | ㉒ 播磨灘物語二   |
|            | ㉒ 最後の将軍他   |
|            | ㉒ 義経       |
|            | ㉒ 妖怪・花の館他  |
|            | ㉒ 妖月・殉死    |
|            | ㉒ 坂の上の雲一   |
|            | ㉒ 坂の上の雲二   |
|            | ㉒ 坂の上の雲三   |
|            | ㉒ 世に棲む日日   |
|            | ㉒ 城塞一      |
|            | ㉒ 城塞二      |
|            | ㉒ 忘れがたく候他  |
|            | ㉒ 花神一      |
|            | ㉒ 花神二・斬殺   |
|            | ㉒ 慶応長崎事件他  |
|            | ㉒ 評論隨筆集    |
|            | ㉒ 付・年譜     |
|            | ㉒ 播磨灘物語一   |
|            | ㉒ 夏草の賦     |
|            | ㉒ 戦雲の夢     |
|            | ㉒ 覇王の家     |
|            | ㉒ 播磨灘物語二   |
|            | ㉒ 最後の将軍他   |
|            | ㉒ 義経       |
|            | ㉒ 妖怪・花の館他  |
|            | ㉒ 妖月・殉死    |
|            | ㉒ 坂の上の雲一   |
|            | ㉒ 坂の上の雲二   |
|            | ㉒ 坂の上の雲三   |
|            | ㉒ 世に棲む日日   |
|            | ㉒ 城塞一      |
|            | ㉒ 城塞二      |
|            | ㉒ 忘れがたく候他  |
|            | ㉒ 花神一      |
|            | ㉒ 花神二・斬殺   |
|            | ㉒ 慶応長崎事件他  |
|            | ㉒ 評論隨筆集    |
|            | ㉒ 付・年譜     |
|            | ㉒ 播磨灘物語一   |
|            | ㉒ 夏草の賦     |
|            | ㉒ 戦雲の夢     |
|            | ㉒ 覇王の家     |
|            | ㉒ 播磨灘物語二   |
|            | ㉒ 最後の将軍他   |
|            | ㉒ 義経       |
|            | ㉒ 妖怪・花の館他  |
|            | ㉒ 妖月・殉死    |
|            | ㉒ 坂の上の雲一   |
|            | ㉒ 坂の上の雲二   |
|            | ㉒ 坂の上の雲三   |
|            | ㉒ 世に棲む日日   |
|            | ㉒ 城塞一      |
|            | ㉒ 城塞二      |
|            | ㉒ 忘れがたく候他  |
|            | ㉒ 花神一      |
|            | ㉒ 花神二・斬殺   |
|            | ㉒ 慶応長崎事件他  |
|            | ㉒ 評論隨筆集    |
|            | ㉒ 付・年譜     |
|            | ㉒ 播磨灘物語一   |
|            | ㉒ 夏草の賦     |
|            | ㉒ 戦雲の夢     |
|            | ㉒ 覇王の家     |
|            | ㉒ 播磨灘物語二   |
|            | ㉒ 最後の将軍他   |
|            | ㉒ 義経       |
|            | ㉒ 妖怪・花の館他  |
|            | ㉒ 妖月・殉死    |
|            | ㉒ 坂の上の雲一   |
|            | ㉒ 坂の上の雲二   |
|            | ㉒ 坂の上の雲三   |
|            | ㉒ 世に棲む日日   |
|            | ㉒ 城塞一      |
|            | ㉒ 城塞二      |
|            | ㉒ 忘れがたく候他  |
|            | ㉒ 花神一      |
|            | ㉒ 花神二・斬殺   |
|            | ㉒ 慶応長崎事件他  |
|            | ㉒ 評論隨筆集    |
|            | ㉒ 付・年譜     |
|            | ㉒ 播磨灘物語一   |
|            | ㉒ 夏草の賦     |
|            | ㉒ 戦雲の夢     |
|            | ㉒ 覇王の家     |
|            | ㉒ 播磨灘物語二   |
|            | ㉒ 最後の将軍他   |
|            | ㉒ 義経       |
|            | ㉒ 妖怪・花の館他  |
|            | ㉒ 妖月・殉死    |
|            | ㉒ 坂の上の雲一   |
|            | ㉒ 坂の上の雲二   |
|            | ㉒ 坂の上の雲三   |
|            | ㉒ 世に棲む日日   |
|            | ㉒ 城塞一      |
|            | ㉒ 城塞二      |
|            | ㉒ 忘れがたく候他  |
|            | ㉒ 花神一      |
|            | ㉒ 花神二・斬殺   |
|            | ㉒ 慶応長崎事件他  |
|            | ㉒ 評論隨筆集    |
|            | ㉒ 付・年譜     |
|            | ㉒ 播磨灘物語一   |
|            | ㉒ 夏草の賦     |
|            | ㉒ 戦雲の夢     |
|            | ㉒ 覇王の家     |
|            | ㉒ 播磨灘物語二   |
|            | ㉒ 最後の将軍他   |
|            | ㉒ 義経       |
|            | ㉒ 妖怪・花の館他  |
|            | ㉒ 妖月・殉死    |
|            | ㉒ 坂の上の雲一   |
|            | ㉒ 坂の上の雲二   |
|            | ㉒ 坂の上の雲三   |
|            | ㉒ 世に棲む日日   |
|            | ㉒ 城塞一      |
|            | ㉒ 城塞二      |
|            | ㉒ 忘れがたく候他  |
|            | ㉒ 花神一      |
|            | ㉒ 花神二・斬殺   |
|            | ㉒ 慶応長崎事件他  |
|            | ㉒ 評論隨筆集    |
|            | ㉒ 付・年譜     |
|            | ㉒ 播磨灘物語一   |
|            | ㉒ 夏草の賦     |
|            | ㉒ 戦雲の夢     |
|            | ㉒ 覇王の家     |
|            | ㉒ 播磨灘物語二   |
|            | ㉒ 最後の将軍他   |
|            | ㉒ 義経       |
|            | ㉒ 妖怪・花の館他  |
|            | ㉒ 妖月・殉死    |
|            | ㉒ 坂の上の雲一   |
|            | ㉒ 坂の上の雲二   |
|            | ㉒ 坂の上の雲三   |
|            | ㉒ 世に棲む日日   |
|            | ㉒ 城塞一      |
|            | ㉒ 城塞二      |
|            | ㉒ 忘れがたく候他  |
|            | ㉒ 花神一      |
|            | ㉒ 花神二・斬殺   |
|            | ㉒ 慶応長崎事件他  |
|            | ㉒ 評論隨筆集    |
|            | ㉒ 付・年譜     |
|            | ㉒ 播磨灘物語一   |
|            | ㉒ 夏草の賦     |
|            | ㉒ 戦雲の夢     |
|            | ㉒ 覇王の家     |
|            | ㉒ 播磨灘物語二   |
|            | ㉒ 最後の将軍他   |
|            | ㉒ 義経       |
|            | ㉒ 妖怪・花の館他  |
|            | ㉒ 妖月・殉死    |
|            | ㉒ 坂の上の雲一   |
|            | ㉒ 坂の上の雲二   |
|            | ㉒ 坂の上の雲三   |
|            | ㉒ 世に棲む日日   |
|            | ㉒ 城塞一      |
|            | ㉒ 城塞二      |
|            | ㉒ 忘れがたく候他  |
|            | ㉒ 花神一      |
|            | ㉒ 花神二・斬殺   |
|            | ㉒ 慶応長崎事件他  |
|            | ㉒ 評論隨筆集    |
|            | ㉒ 付・年譜     |
|            | ㉒ 播磨灘物語一   |
|            | ㉒ 夏草の賦     |
|            | ㉒ 戦雲の夢     |
|            | ㉒ 覇王の家     |
|            | ㉒ 播磨灘物語二   |
|            | ㉒ 最後の将軍他   |
|            | ㉒ 義経       |
|            | ㉒ 妖怪・花の館他  |
|            | ㉒ 妖月・殉死    |
|            | ㉒ 坂の上の雲一   |
|            | ㉒ 坂の上の雲二   |
|            | ㉒ 坂の上の雲三   |
|            | ㉒ 世に棲む日日   |
|            | ㉒ 城塞一      |
|            | ㉒ 城塞二      |
|            | ㉒ 忘れがたく候他  |
|            | ㉒ 花神一      |
|            | ㉒ 花神二・斬殺   |
|            | ㉒ 慶応長崎事件他  |
|            | ㉒ 評論隨筆集    |
|            | ㉒ 付・年譜     |
|            | ㉒ 播磨灘物語一   |
|            | ㉒ 夏草の賦     |
|            | ㉒ 戦雲の夢     |
|            | ㉒ 覇王の家     |
|            | ㉒ 播磨灘物語二   |
|            | ㉒ 最後の将軍他   |
|            | ㉒ 義経       |
|            | ㉒ 妖怪・花の館他  |
|            | ㉒ 妖月・殉死    |
|            | ㉒ 坂の上の雲一   |
|            | ㉒ 坂の上の雲二   |
|            | ㉒ 坂の上の雲三   |
|            | ㉒ 世に棲む日日   |
|            | ㉒ 城塞一      |
|            | ㉒ 城塞二      |
|            | ㉒ 忘れがたく候他  |
|            | ㉒ 花神一      |
|            | ㉒ 花神二・斬殺   |
|            | ㉒ 慶応長崎事件他  |
|            | ㉒ 評論隨筆集    |
|            | ㉒ 付・年譜     |
|            | ㉒ 播磨灘物語一   |
|            | ㉒ 夏草の賦     |
|            | ㉒ 戦雲の夢     |
|            | ㉒ 覇王の家     |
|            | ㉒ 播磨灘物語二   |
|            | ㉒ 最後の将軍他   |
|            | ㉒ 義経       |
|            | ㉒ 妖怪・花の館他  |
|            | ㉒ 妖月・殉死    |
|            | ㉒ 坂の上の雲一   |
|            | ㉒ 坂の上の雲二   |
|            | ㉒ 坂の上の雲三   |
|            | ㉒ 世に棲む日日   |
|            | ㉒ 城塞一      |
|            | ㉒ 城塞二      |
|            | ㉒ 忘れがたく候他  |
|            | ㉒ 花神一      |
|            | ㉒ 花神二・斬殺   |
|            | ㉒ 慶応長崎事件他  |
|            | ㉒ 評論隨筆集    |
|            | ㉒ 付・年譜     |
|            | ㉒ 播磨灘物語一   |
|            | ㉒ 夏草の賦     |
|            | ㉒ 戦雲の夢     |
|            | ㉒ 覇王の家     |
|            | ㉒ 播磨灘物語二   |
|            | ㉒ 最後の将軍他   |
|            | ㉒ 義経       |
|            | ㉒ 妖怪・花の館他  |
|            | ㉒ 妖月・殉死    |
|            | ㉒ 坂の上の雲一   |
|            | ㉒ 坂の上の雲二   |
|            | ㉒          |



田原坂周辺図

地図製作・高野橋康